宇宙戦艦ヤマト　イスカンダルへの旅

GrandFleet

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

無限に広がる大宇宙。我々の母なる星、地球。時に西暦２１９９年。そこへ、ガミラスと名乗る惑星国家が現れ、地球への攻撃を開始した。世界各国は戦力を統合し立ち向かうも、圧倒的な軍事力と科学力の前に敗北を喫した。さらに、ガミラスは冥王星に前線基地を建設し遊星爆弾による攻撃を開始した。遊星爆弾により、地球は青い姿から赤い姿に変わり果ててしまった。大気は放射能に汚染され、このままでは地球は約１年後に人類が住むことの出来ない環境になってなってしまうという・・・。

目次

メカ設定　地球防衛軍艦艇 ―― 1
メカ設定　ガミラス艦艇編 ―― 4
第１話　冥王星沖海戦 ―― 9
第２話　イスカンダルの使者 ―― 20
第３話　帰還 ―― 31
第４話　沈没戦艦 ―― 39
第５話　発動、ヤマト計画 ―― 44
第６話　甦れ、宇宙戦艦ヤマト ―― 50
第７話　号砲一発　宇宙戦艦ヤマト始動 ―― 59
第８話　最後の希望 ―― 69
第９話　光速を越える、ワープ航法 ―― 85
第１０話　浮遊大陸 ―― 102

メカ設定　地球防衛軍艦艇

メカ設定　地球防衛軍編

宇宙戦艦キリシマ

全長　２００ｍ

全幅　２７．５ｍ

機関　艦本式コスモタービン　８基　１軸

武装　３６ｃｍ艦首陽電子衝撃砲　１門

３６ｃｍ３連装陽電子砲　４基

魚雷発射管　８門

垂直ミサイル発射管　１６門

対空用２５ｍｍ連装機銃　１０基

金剛型宇宙戦艦４番艦。重厚な装甲と高い火力を有する宇宙戦艦。艦番号は、ＢＢＳ－５５５。沖田十三が乗艦し、艦隊旗艦として戦闘している。同型艦には、コンゴウ　ヒエイ　ハルナ　フソウ　ヤマシロ　イセ　ヒュウガ　の７隻が存在したが、キリシマを除いて戦没している。

村雨型宇宙巡洋艦

全長　１５２ｍ

全幅　２５ｍ

機関　艦本式コスモタービン　１２基　１軸

武装　２０ｃｍ艦首陽電子衝撃砲　１門

２０ｃｍ連装陽電子砲　３門

５３ｃｍ魚雷発射管　４門

２１７０年に就役した宇宙巡洋艦。キリシマには劣るが、走攻守のバランスと量産性に優れた宇宙巡洋艦である。

雪風型突撃宇宙駆逐艦

全長　６８．５ｍ

全幅　２４ｍ

機関　艦本式コスモタービン　３基　１軸

武装　１２．７ｃｍ３連装陽電子砲　２基

１２．７ｃｍ艦首砲　２門
６１ｃｍ魚雷発射管　３門
６１ｃｍミサイル発射管　８門

地球防衛軍艦艇の中では一番の小型艦。機動力に優れているため、通常艦には難しい動きも可能である。

宇宙戦艦ヤマト
全長　２６３ｍ
全幅　３４．６ｍ
機関　波動エンジン　１基　１軸
　艦本式コスモタービン改　８基　２軸

武装
艦首波動砲　１門（口径２００ｃｍ）
４６ｃｍ３連装衝撃砲　３基
１５．５ｃｍ３連装衝撃砲　２基
６１ｃｍ魚雷発射管　艦首６門　艦尾６門
ミサイル発射管　右舷８門　左舷８門　艦底８門
９４式爆雷投射機
１２．７ｃｍ４連装パルスレーザー砲　８基
１２．７ｃｍ連装パルスレーザー砲　８基
８．８ｃｍ３連装パルスレーザー砲　４基
７．５ｃｍ連装パルスレーザー砲　１０基
７．５ｃｍ３連装パルスレーザー砲　４基
２５ｍｍ３連装６砲身迎撃砲　２基（司令塔防御火器）

艦載機
コスモゼロ５２型　１機　予備機　１機
ブラックタイガー　３２機　予備機　４機
救命艇　２機
９０式内火艇　２隻
１００式空間偵察機　２機
キ８型特殊探索艇　１艇
特２式多目的換装車　６輌

修理艇　６艇
特殊装備　波動防壁　バルーンダミー
ロケットアンカー　反重力感応器

戦艦大和を改造して完成させた宇宙戦艦。本来は、地球から人類を脱出させ別の星へ移住させる移民船として建造されたが、イスカンダルより技術供与された波動エンジンを登載し、人類初のワープ航行を可能にした。

※ヤマト以外の艦艇の機関は公式やＷｉｋｉｐｅｄｉａ等に記載が無いため、ヤマトの補助エンジンであるコスモタービンにしています。

※キリシマ以外の金剛型の艦名は旧海軍の戦艦の名前にしています。キリシマはリメイク作品では５番艦ですが、金剛型なので戦艦霧島同様、４番艦ということにしました。

※ヤマトの主砲については、陽電子衝撃砲ではなく、旧作の衝撃砲（ショックカノン）とします。

※ヤマトの司令塔防御火器は詳しい情報が無いためオリジナルです。

※ブラックタイガーは、リメイクアニメの波動エンジンを中心にしたロータリー式格納庫に格納されていることにします。なお、ブラックタイガーはＰＳ用ゲーム版や、コスモファルコンのように対艦攻撃が可能に設定しています。

※第２艦橋は旧作同様に航海艦橋、第３艦橋はリメイク作品と同じように波動防壁と慣性制御用の制御を行う艦橋としています。

メカ設定　ガミラス艦艇編

ガイデロール級航宙戦艦
全長　２７０ｍ
全幅　５５ｍ
機関　ゲシュ＝タム機関　１基　１軸
武装
３３ｃｍ３連装陽電子砲
２８．３ｃｍ３連装陽電子砲
５３ｃｍ魚雷発射管　艦首１２門　艦底２１門
ガミラス軍の戦艦。冥王星基地に配備された艦隊の旗艦。同基地司令シュルツの乗艦である。

デストリア級航宙重巡洋艦
全長　１８０ｍ
全幅　７０．２ｍ
機関　ゲシュ＝タム機関　１基　１軸
武装
２８．３ｃｍ３連装陽電子砲　甲板３基　艦底部２基
２８．３ｃｍ３連装舷側陽電子砲郭　４基
５３ｃｍ魚雷発射管　４門

ガミラス軍の主力艦艇の一つ。高い火力と、雷撃力が持ち味。デストリア級を基本に改良された艦艇が続々と収益しているなかでも様々な艦隊に配備されている。

ケルカピア級高速巡洋艦
全長　２００ｍ
全幅　７０．２ｍ
機関　ゲシュ＝タム機関　１基
武装
２０．３ｃｍ連装陽電子砲　２基
６１ｃｍ魚雷発射管　右舷１門　左舷１門

デストリア級の火力と航洋性能を強化したタイプ。変更点はデストリア級より大型化させ、砲搭は搭載数の削減と口径を縮小させた。その一方で速射性に優れている。デストリア級と比べて低下した火力を発射回数で補うという設計になっている。

クリピテラ級駆逐艦

全長　１２６ｍ

全幅　３７ｍ

機関　ゲシュ＝タム機関１基　１軸

武装

１５．２ｃｍ連装陽電子砲　１基（艦底部）

６１ｃｍ艦首魚雷発射管　４門

垂直発射式ミサイルランチャー　６門

１２ｃｍ単装パルスレーザー砲　１基

雷撃力と高速化を実現させるため、搭載する砲搭の数を減らしミサイル攻撃に重点を置いたタイプ。砲搭の数が減った分、小型化できた。それにより小回りも他の艦よりも利くため、アステロイド帯に潜んで敵への奇襲作戦を得意とする。

ゼルグート級航宙戦艦

全長　３５０ｍ

全幅　９７．５ｍ

機関　ゲシュ＝タム機関　１基

小型ゲシュ＝タム機関　１基　　計　２基８軸

武装

４９ｃｍ３連装陽電子砲　６基

３３ｃｍ３連装陽電子砲　４基

ガミラス軍の艦艇の中で砲火力、装甲防御に重点を置いて開発された艦艇。正面装甲はとても硬く、並みの陽電子砲は簡単に跳ね返す。主砲口径は４９ｃｍと大型のものを搭載している。その反面、機動力は犠牲になってしまった。

メルトリア級装甲巡洋艦

全長２２１．５ｍ
全幅７０．２ｍ
機関　ゲシュ＝タム機関　１基　１軸
武装
３３ｃｍ３連装陽電子カノン砲　２基
舷側２８ｃｍ３連装陽電子カノン砲　４基
２８ｃｍ３連装陽電子砲　２基（艦底部・艦尾）
６１ｃｍ艦首魚雷発射管　８門
特殊装備
新規に開発された艦艇。デストリア級とケルカピア級の特性を併せ持った艦。まだ、一部の艦隊にしか配備されていない。

デラメヤ級強襲揚陸艦
全長９２．３ｍ
全幅３８ｍ
武装
１２．７ｃｍ連装砲　１基
搭載車両
サルバーＳ―Ⅵ型重戦車　６両
ポルメリア級高速空母
全長　２６０ｍ
全幅　２６０ｍ
機関　ゲシュ＝タム機関　１基
武装
収納式５３ｃｍ７連装ミサイル発射管
５０ｃｍレーザー砲　１門
１０．５ｃｍ連装リボルバー式対空レーザー砲　１基
艦載機
戦闘攻撃機メランカ　３５機
偵察機スマルヒ　５機
特殊装備
占領した惑星での監視活動を行ったり、敵地に強襲を行うための艦

艇。艦載機には戦闘攻撃機メランカ、偵察機スマルヒを搭載。艦底部の陽電子砲は敵の要所への砲撃を主に使用される。

ガイペロン級航宙母艦

全長２００ｍ

全幅６２．５ｍ

機関　ゲシュ＝タム機関　１基　２軸

武装

１３．３ｃｍ３連装陽電子砲　６基

３３ｍｍ４連装パルスレーザー砲　１１基

艦載機

艦上戦闘機デバッケ　２０機

艦上爆撃機スヌーカ　２０機

艦上雷撃機ドルシーラ　２０機

特殊装備

ガミラス軍の主力航宙母艦。長きに渡って運用されてきた艦艇であるため、建造された時期によって同型艦でも若干の違いがある。

ゲルバデス級戦闘航宙母艦

全長２００ｍ

全幅３２ｍ

機関　ゲシュ＝タム機関　２基　５軸

武装

２８ｃｍ３連装陽電子砲８基

２８ｃｍ連装陽電子砲４基

２８ｃｍ連装陽電子砲２基

５３ｃｍ３連装ミサイルランチャー４基

艦載機

重爆撃機ガルント　１機

特殊装備

ガイペロン級に並ぶ主力艦艇。ガイペロン級との違いは航空戦のみならず、砲撃戦も可能という特殊な艦。戦闘モードに移行すると、飛行甲板が裏返り砲搭が現れる。

デスラー艦
全長　２００ｍ
最大幅　３５ｍ
機関　ゲシュ＝タム機関　１基　６軸
武装
デスラー砲　１門（口径　２００ｃｍ）
３３ｃｍ陽電子砲　３門
５３ｃｍミサイル発射管　８門

デスラー専用の艦艇。艦首にはガミラス軍が開発した波動砲。ゲシュ＝バールダム、通称デスラー砲が搭載されている。

※ゼルグート級は、機関を２基積んでいるという設定にしました。あれだけの重装甲に多数の砲搭を搭載しています。その上、瞬間物質移送機も搭載するので機関は１基だけでなく、２基搭載してもおかしくないと思い、２基にしました。

※メルトリア級の全長は本来は２８３ｍです。ですが、その他の艦艇を旧作基準にしているのである程度小型化しています。

※ガミラス艦特有の艦首の大きな穴は、旧作のビーム兵器ではなくリメイク作品のように航海から戦闘に移行する時に発光するやつにします。

※ガミラス艦はゲシュ＝タムフィールド（波動防壁）ではなく帯磁性特殊加工を施した装甲で防御力を強化しています。

第1話　冥王星沖海戦

無限に広がる大宇宙
光と闇が広がる、静寂に包まれた世界。
そこには、生まれてくる星があれば、寿命を迎え死んでしまう星も存在する。
我々人類の母なる星、地球。
地球は今や死に至ろうとしていた……。

〝ねえ、兄さん。あの星の、どこに父さんや母さんの星があるの？〟

暗闇の中を進む駆逐艦ゆきかぜの艦橋で、艦長古代守は1人呟いていた。
岩津「冥王星軌道に入りました、間もなく作戦宙域に入ります」
作戦の舞台となる冥王星宙域に入ったことを、副長の岩津英二が伝えた。
守「そうか、ありがとう」
岩津「いえ。それより、何ですか今の？」
守「ああ。これはまだ弟が小さい時に、俺に言った言葉なんだ」
岩津「確か、ご両親は遊星爆弾で……」
守「この宇宙にはたくさんの星がある。人の数ほど存在するって言われているけど、沢山あるよな」
岩津「何処にあるんでしょうね？ご両親の星は……」

守　「うん・・君の奥さんの星もな」
しんみりとした空気の中、２人の会話が途切れたそのときだった。
電測員が声を上げる。
電測員　「レーダーに感あり。敵艦反応確認!!」
先程とは打って変わって、艦橋に緊迫した空気が流れる。
電測員　「右舷前方、２時の方向より急速接近中」
レーダースクリーンに現れる４つの敵艦を示す印。ものすごい速度でゆきかぜに接近してくる。
守が双眼鏡で覗いて見ると、駆逐艦らしき小型艦であった。操舵手と通信士にすぐさま指示を出す。
守　「反転１８０度、直ちに本隊へ連絡せよ」
操舵手・通信士　「了解」
ゆきかぜは、すぐさま反転。本隊に合流するため、急いで離脱した。

ガミラス軍冥王星基地司令部
通信士　「シュルツ司令、哨戒中の駆逐隊がテロンの艦艇を発見しました」
ガミラス軍冥王星基地の通信士が駆逐艦からの報告を基地司令シュルツ大佐に伝えていた。
シュルツ　「数は？」
通信士　「１隻です」
シュルツ　「１隻・その後の動きは？」
通信士　「すぐさま反転し、逃げたようです。そのまま追跡させますか？」
通信士の報告を受け、シュルツは顎に手を添え考えた。
シュルツ　「いや、放っておけ」
ガンツ　「宜しいのですか？」
放置するという答えに副官のガンツ少佐が首をかしげる。
シュルツ　「偵察任務中の空母が、テロンの艦隊が出撃するところを捉えている。奴らは此処に来るはずだ」

シュルツは地球軍の艦隊は必ず現れると確信していた。
シュルツ「全艦に、出撃命令を出せ。これよりテロンの艦隊の迎撃に出る」
ガミラス艦隊は地球艦隊との戦闘に備え、出撃準備を開始した。

地球艦隊　旗艦　きりしま
ゆきかぜからの通信を受信したことを、通信士が初老の男性に伝える。
通信士「提督、先遣艦〈ゆきかぜ〉より入電です」
「読んでくれ」
通信士「我、敵駆逐艦ラシキ艦艇ヲ確認」
「・・」
初老の男性。艦隊司令長官沖田十三は通信士の報告を無言で聞いていた。
山南「提督」
きりしま　艦長山南修が指示を仰ぐ。
沖田「全艦に警戒体制の強化と、乗員に船外服の着用を命じろ。」
山南「はっ」
沖田の指示が発光信号で全艦艇に伝えられる。本隊はガミラス艦隊に位置を知られない為に、ゆきかぜを除いて無線封鎖をしている。
闇の中で一糸乱れぬ艦隊運動を続け、冥王星沖を目指す。そこへ、敵艦発見の通信から2時間後、ゆきかぜが艦隊に合流した。
通信士「ゆきかぜ、合流しました」
沖田「全艦、第1級非常体制。警戒を怠るな」
沖田の指示で、警戒しながら前進する地球艦隊。
電測員「只今より冥王星宙域に入ります」
電測員の目付きが変わった。これまで以上に真剣な眼差しでレーダースクリーンで監視を行う。
ここは既に敵の勢力圏内。警戒を怠れば、奇襲を受けて敵の本隊と戦う前にやられてしまう可能性もある。

そして、冥王星の衛星カロンの軌道を抜けた先に、奴らは待ち構えていた。
電測員「レーダーに感あり。左舷１５度、距離１０万ｋｍ。艦隊を確認、ガミラス艦隊です!!」
電測員が報告すると、艦橋内は慌ただしくなる。
沖田（出てきたな、悪魔〈ガミラス〉め）
沖田は、内心そう呟いた。
沖田「これよりメ号作戦を発動する。全艦、戦闘配備!!」
作戦の開始が宣言され、ブリッジから艦内各所へ指示が飛ぶ。
通信士「電波管制解除」
山南「艦種識別急げっ」
山南艦長の指示でデータから敵艦隊の編成の解析が行われていた。
電測員「戦艦１　重巡１５　軽巡２２　駆逐艦５０」
地球艦隊の戦力は、戦艦１隻　巡洋艦９隻　駆逐艦１４隻。ガミラス艦隊の戦力は地球艦隊を大きく上回っていた。
電測員「敵艦隊、面舵をとりました」
沖田「面舵３０。全艦、砲雷撃戦用意」
操舵手「おもーかーじ」
ガミラス艦隊は地球艦隊の頭を押さえるように進路を変更した。沖田も同航戦を挑む形で進路を変更。巡洋艦、駆逐艦は回避行動を行う場合を考え、間隔を開けきりしまに続く。
砲雷長「左舷、照準合わせ」
各艦の陽電子砲が左舷に向けられる。後は敵艦を射程圏に捉えるだけだ。
通信士「提督、敵艦隊より通信が入っています」
通信士が敵艦からの入電を報告した。
沖田「読め」
通信士「「地球艦隊二告グ、直チニ降伏セヨ」」
沖田「返信はどうしますか？」
敵の降伏勧告に対し、沖田の答えは……。
沖田「バカめと伝えろ」

通信士「はっ？」
沖田　「「バカめ」だ」
通信士「はっ！」

地球艦隊を待ち構えていたガミラス艦隊に地球側の返信がやってきた。
シュバリエル　艦橋
シュルツ「シュルツ司令、テロンより返信です」
地球側の返信を受け取ったガミラス艦隊。
通信士「「バカめ」以上になります」
ガンツ「なんだと!?我々を馬鹿にしているのか!!」
「バカめ」の返信に怒りを顕にするガンツ。
シュルツ「ガンツ、彼らも軍人として・・・いや、テロン人として屈しないという意志を示しているのだろう」
シュルツは地球艦隊からの返信に気を悪くすることはなかった。
シュルツ「ガミラスを受け入れれば、生きることも出来ただろうに」
シュルツは、残念そうに地球艦隊を見据えた。
伝令「シュルツ司令、攻撃準備完了しました」
部下の1人が攻撃準備が整ったことを伝える。
シュルツ「目標、敵艦隊。砲撃開始」
艦隊全体に攻撃命令が下された。砲門が煌めき、数多の赤い光の筋が地球艦隊に襲いかかる。

きりしま　艦橋
応急長「上部甲板に被弾!!、損害軽微」
艦橋に被弾の衝撃。敵弾はきりしまの船体前方、上部甲板を掠り流れていく。

電測員「巡洋艦くらま、被弾。隊列を離れます」
だが、きりしまの後方についていた巡洋艦くらまが被弾した。黒煙を引いて、隊列から離れていく。
次の瞬間には、くらまの艦体は爆散した。
電測員「くらま、轟沈」
山南「提督!!攻撃を」
沖田「まだだ。まだ距離がある」
山南が攻撃許可を求めるが、沖田はこれを許可しなかった。まだ、全ての艦が敵を射程圏に捉えいない。光学測距儀での測的が続く。今は、敵弾が当たらないことを祈りながら待つしかない。
砲雷長「敵艦、射程圏内へ。照準よろし」
ついに、艦隊の攻撃体制が整った。
沖田「全砲門開け、撃てっ」
今度は地球艦隊が反撃に出る。緑色の光線がガミラス艦隊に襲いかかる。照準は完璧、ガミラス艦に向かって一直線に向かう。そして命中しようとしたその時、ガミラス艦の船体に直撃した陽電子砲は跳ねて敵艦の向こう側に流れていく。
沖田「くっ・・」
やはり、陽電子砲では通用しなかった。火星戦役前に改修を受け搭載された艦首衝撃砲であれば撃沈できるのだが、問題があった。それは、エネルギーを充填している間は無防備な状態になってしまうことだ。充填作業中は全エネルギーを集中させるために他の武装は使用不可になってしまう。また、ガミラスも艦首衝撃砲による被害の教訓をもとに、正面からの突撃ではなく丁字戦を挑んできた。それだと、陽電子衝撃砲の充填中にやられてしまうために同航戦の形をとり戦闘に入るしかなかった。砲撃は地球艦隊に襲いかかる。
電測員「ふゆづき、被弾!!」
次に被弾したのは、駆逐艦ふゆづきであった。
ふゆづき　艦橋
艦長「被害報告!!」
艦橋に艦長の声と、警報音が響く。被弾した船体が激しく揺れる。

操舵手が必死に船体を制御しようと必死に操縦桿を握るが、上手くいかない。艦の状態を表すモニターに、被害が表示される。
副長「艦尾に被弾!!推進機及び、舵がやられました」
艦長「スラスター最大出力、船体を安定させるんだ。それから通信士、他の艦に通信。「我、操舵不能。衝突二注意サレタシ」急げ!!」
操舵手・通信士「りょ、了解」
艦長はふゆづきの状況を伝えるよう命じた。
きりしま　艦橋
通信士「ふゆづきより入電「我、操舵不能。衝突二注意サレタシ」」
操舵不能に陥ったふゆつきは、スラスターを吹かして船体を安定させようと試みるが、後続の巡洋艦つるぎに激突。どちらも轟沈してしまった。
地球艦隊は圧倒的な戦力の前に、苦戦を強いられた。そして、きりしまを敵弾が襲う。
応急長「右舷船体中央部、艦尾損傷」
砲雷長「主砲、動力供給ストップ」
応急長「シアンガス発生」
２度目の被弾は、きりしまの戦闘能力を大きく減少させた。主砲へ動力を供給する機構がダメージを受け停止。さらに、シアンガスが発生。急いで隔壁の閉鎖が開始される。乗員がその区画に残っていようが隔壁は閉鎖されていく。そうでもしなければ全体にガスが充満してしまい、被害は甚大なものになってしまう。さらに、機関も出力が低下し始めた。
機関室
藪「推力低下が止まらない。このままじゃエンジンが…」
徳川「藪。ぼやくためじゃなく、どうするべきか考えるために頭を使え」
機関長徳川彦左衛門が藪機関員を叱咤する。機関員は応急修理に取りかかる。
徳川「大丈夫だ。この艦は、あの沖田十三の乗艦だ。沈まんよ…そして、わしらが沈めさせるものか」

長い間を共に過ごしてきた戦友の艦を守り抜く。覚悟を口にすることで己に喝を入れる。機関科の戦いが始まろうとしていた。
ガミラス艦隊は攻撃の手を緩めることなく攻めたたててくる。
きりしま　艦橋
砲雷長「第３主砲中破。」
きりしまの艦橋と一体化した主砲塔に、攻撃による被害が発生、大きな振動が艦橋に走る。
電測員「巡洋艦むらくも、轟沈。駆逐艦しきなみ大破」
通信士「駆逐艦いそかぜ、あやせ通信途絶」
電測員「巡洋艦あぶくま大破、ゆうぎり轟沈」
味方艦の被害の情報が飛び交う。
電測員「味方艦損耗率７６％!!　駆逐艦あきづき大破」
相次ぐ被害報告。山南が次の指示を伺おうと、沖田へ視線を向けると▪▪沖田の制服右腕部分が破れ、血が滲んでいた。
山南「提督！」
沖田「構わん。ただのかすり傷だ」
沖田は軽傷だと言うが、止血しなければ今後の指揮に影響が出るかもしれない。
山南「衛生兵を呼べ」
山南は衛生兵をブリッジに呼ぶよう指示した。
沖田「アマテラスはまだか？」
電測員「未だ確認出来ません」
沖田は電測員に、メ号作戦の最大目標の〝アマテラス〟について問う。だが、返ってきた返事は認められないというものだった。そこへ、耳を疑うような報告が入ってきた。
電測員「味方艦１隻が、敵艦隊に突撃して行きます!!」
沖田「誰の艦か？」
電測員「駆逐艦ゆきかぜ。古代少佐の艦です」
沖田は無線で呼び戻そうとした。
沖田「古代、今すぐ隊列に戻るんだ」
守「沖田さん、本艦の武装では接近しなければ歯が立ちません。敵

の懐まで援護を願います」
援護要請をすると、守は通信を切ってしまった。敵艦隊に突入するなど、自殺行為でしかない。だが、守は敵を沈める秘策があるのだろう。ゆきかぜは敵艦隊へ突撃していく。
砲雷長「ミサイル撃てます」
沖田「ゆきかぜの前方に発射。道をこじ開ける」
発射管が開き、ミサイルが飛んでいく。敵に損害を与えることはできなくても、爆風や黒煙でゆきかぜへの照準を妨害することはできる。敵は接近してくるゆきかぜへ砲を向け、弾幕を張り始める。
ゆきかぜ　艦橋
電測員「敵の弾幕来ます」
守「右、上げ舵２０。左下げ舵３０」
敵の光線を持ち前の機動力で回避していく。先行したミサイルは敵艦隊の前で爆発。敵の砲撃が止んだ。
守「今だ、この隙に敵艦隊に突入する!!」
きりしまが作ったチャンスを無駄にせず、敵艦隊に突入した。
守「飛び道具しかない密集体形は、一歩中に入られたら簡単に崩れるものさ」
侵入を果たしたゆきかぜは、敵に狙いを定める
守「左舷前方の敵重巡の艦橋正面へ。主砲発射用意」
敵の砲の軸線に入らないよう注意しながら、狙いをつける。
砲雷長「主砲、用意よし」
守「撃てぇ」
１２．７ｃｍ陽電子砲が吠える。砲撃されたデストリア級は慌てて回避行動を開始した。だが、近くを航行していたクリピテラ級は急な進路変更に対応出来ず、デストリア級に追突されどちらも轟沈した。
守「臆病者め。船の装甲は厚くても、心の装甲は薄いようだな」
敵艦を2隻撃沈したゆきかぜを、光線が襲う。初めての被弾の振動が船体に走る。
守「被害報告!!」

操舵手「艦尾損傷。されど航行に支障無し」
敵弾はゆきかぜの艦尾の主翼を掠めたようだ。
守「よし。なら次は、高速巡洋艦を狙う。魚雷戦用意」
次の獲物を狙う位置に付く。
電測員「敵巡洋艦、距離８５００」
砲雷長「敵速２９ノット、雷速４８ノット」
敵艦の速度、予想される進路にて魚雷が命中する速度の算出が開始される。
砲雷長「魚雷発射用意よし」
守「１番発射管、撃てぇ」
発射管より放たれる試製空間魚雷。今回の作戦にあわせて、ゆきかぜにのみ搭載された。新型魚雷は、狙い違わずクリピテラ級目掛けて突き進む。そして…。
電測員「魚雷命中、撃沈しました!!」
守「よし!!」
電測員「駆逐艦２。急速接近中」
守「続き、２番３番開け」
接近してくる駆逐艦に向かって、装填された魚雷が発射される。
シュバリエル艦橋
通信士「シュルツ司令、敵艦１隻が我が艦隊に突入し、重巡１隻、高巡２隻が撃沈されました!!。現在、駆逐艦が対処に当たっています」
シュルツ「何だと…」
シュルツは部下の報告に驚いた。地球艦隊の陽電子砲は船体に施された帯磁特殊加工（ミゴウェザーコーティング）によって無効果できていた。艦首陽電子衝撃砲の攻撃を受けないように同航戦を採った。なのに撃沈されたというのは想定外だった。艦橋にいるクルーに動揺が生まれる
シュルツ「直ちに近くの駆逐隊も迎撃させろ。傷が浅いうちに沈めるのだ」
通信「了解」
きりしま　艦橋

電測員「駆逐艦よいづき爆沈。巡洋艦あぶくま大破、本艦の進路前方に来ます」
山南「回避行動」
艦隊はすでに半数が撃沈さていた。このままでは作戦目標達成前に壊滅してしまう。
沖田（奴らに、この艦では勝てん。まだなのか、アマテラスよ…）
今か今かと待ち望んだ報告がついにやって来た。
電測員「〝アマテラス〟来ました。予定のコースに入った模様。火星到着まで約１０分」
沖田「司令部へ暗号打電〝アマノイワトヒラク〟」

地球防衛軍極東基地　日本司令部
通信士「暗号通信が入電しました」
男性オペレーターから暗号通信が入った事が告げられた
参謀「一体どこからだ？」
通信士「旗艦きりしまからです。解析します」
オペレーターは暗号通信の解析進めていく。
通信士「沖田提督からです。〝アマノイワトヒラク〟」
司令部に歓声が湧いた。…待ち望んだ報告であった。
藤堂「沖田君、よくぞ…」
ガイゼル髭を蓄えた男性、防衛軍極東基地司令長官藤堂平九朗が冥王星で戦う戦友の名を呼ぶ。
土方土方「長官、メ号作戦はまだ終わっていません。この後に一番の難所が待ち構えています」
藤堂長官の隣には、宇宙戦士訓練学校校長の土方竜がいた。
藤堂「そうだな、火星の観測員に連絡してくれ」
通信士「了解」
ついに、メ号作戦の最優先目標である〝アマテラス〟ー使者との接触の時が来たのだ。

第2話　イスカンダルの使者

真っ赤な大地が広がる惑星。太陽系の惑星の一つ、第４番惑星の火星。人類が宇宙に進出してからは、移住する人が増ていた。火星にはかつて、コロニーと防衛軍の火星基地があり、大勢の人が生活していた。しかし、今となってはコロニーは荒れ放題。火星基地は第２次火星沖海戦と呼ばれた戦いで、ガミラス艦隊の侵攻を食い止める地球艦隊の前線基地として使用された。結果は、ガミラス艦隊の侵攻を食い止めた代わりに基地施設は甚大な被害を受け、放棄されたのだった。火星にいた人間は、ガミラスが火星圏に侵攻して来てからは地球への避難を余儀なくされたのだ。現在の火星には防衛軍の観測ドームがあるだけ。観測ドームには２人の青年が配備されていた。長髪の青年の名は古代進。駆逐艦ゆきかぜ艦長古代守の弟だ。もう１人の短髪の青年の名は島大介。古代進とは、訓練学校の同期であり親友でもある。彼らは特殊訓練のために火星に配備されていた。

島「こうして３週間、同じ真っ赤な地平線を見るのも飽きてこないか？古代」

島が古代に話かける。火星に配備されてからというものドームの外に広がる景色は真っ赤な大地のみ。軍の施設に娯楽などなく、休憩時間に出来ることといえば景色を見ることぐらい。だがそれもずっと見ていれば飽きてしまう。

古代「戦いたい」

島「？」

古代「兄さんが冥王星で戦っているのに、何もしていない自分が嫌になる」

島「変わらないな、お前は。訓練学校の頃のままだけど…」

そこへ、突如大きな揺れが観測ドームを襲った。

古代「な、何だ。地震か？」

島「俺に聞かれてもわからん」

大きな揺れによって２人とも、尻餅をつく。揺れはほんの数十秒で収まった。その直後、通信が入った。

通信士「こちら、地球防衛軍極東基地司令部。古代進、島大介応答せよ」
古代が応答用マイクにスイッチを入れて返答する。
古代「こちら古代進、島大介。司令部どうぞ」
通信士「古代進、島大介に命じる。たった今、冥王星宙域を航行していた宇宙船が火星に墜落した。落下地点の座標を送る、直ちに現地へ向かい調査せよ」
古代「了解」
通信を切り、調査の準備に取りかかる。
島「さっきの地震はそういう事だったのか」
古代「それなら、地球かガミラスの船が被弾して落っこちて来たんだろう」
ヘルメットを取り、航空機格納庫へ向かおうとする古代に対し、島は腕を組んでなにやら考えていた。
古代「どうした、島？」
島「思ったんだが、冥王星から火星までは距離がありすぎる。いくら何でも、こんなに早く火星に来ることができるものなのか？地球の船がこんな短時間で冥王星から火星まで来れるはずはないし、ガミラスの船かと思うんだが」
もし、ガミラスの船だった場合。２人は、敵兵と戦うことになる。
古代「・・一応、コスモガンと医療キットを持って行くか」
島「そうしたほうが良いかもな」
護身用のためのコスモガンを携行し、怪我した時のための医療キットを積み込んで１００式偵察機に乗り込む。この機体は、大型ソリッドを装備しているため滑走路の無い場所でも着陸が可能になっている。操縦席に古代、偵察席に島が搭乗する。自動でゲートが開くと同時に機体のエンジンが始動する。
古代「いくぞ、島」
島「了解。航法なら任せとけ」
１００式偵察機は、離陸滑走入る。十数ｍ走ると、機体は火星の空に舞い上がった。

古代「高度５０００まで上昇」
島「レーダー起動、捜索開始」
レーダーを起動させ、不明船の捜索を開始する。司令部から送られて来た落下地点に進路を向けた。

出発してから４０分、墜落地点へと到達しつつあった。
古代「この辺りだよな」
島「ああ。座標は合っているから、ここらへんに落ちた筈だ」
司令部から送られてきた情報を頼りに、反応があった地点へと到着した。そこには・・・
古代「おい、島。あれを見て見ろ」
島「何だ、あれは・・」
地面には機体が墜落した時にできたと思われる窪みが出来ていた。
島「恐らく、あの先に不明船がいるんだろう」
古代「そうと分かれば、急ごう」
２人は、地面の跡をたどって、不明船の元に向かう。
古代「何だこれは？」
島「見たことのない機体だな」
２人が発見した宇宙船は、地球でもガミラスのものでもなかった。
船体は破損していて、地球艦隊とガミラス艦隊との砲撃戦の流れ弾が運悪く命中してしまったのだと思われた。
島「一体、何処の星のものなんだろうな？」
古代「地球でもガミラスでもないっていうのは確定だな」
島「古代、急いで乗員の捜索をしよう」
古代「そうだな。地球とガミラスの戦いに巻き込まれてしまったのだから、助けられるのなら助けよう」
２人は乗員の捜索入った。各種センサーで船体の残骸から乗員を探していく。しかし、なかなか見つからなかった。

島「なあ古代、乗員がいないぞ」
古代「本当だ。これだけ詳しく調べて、乗員に会わないなんて…。島、もしかしたら脱出したのかもしれない」
島「その可能性もあるな…古代、あれを見ろ！」
島が脱出用のカプセルらしきユニットを発見した。それは、少し離れた地点に墜ちていた。
島「急いで、中を調べよう」
カプセルに近づいてみると
古代「…っ」
島「どうした、古代？」
古代「人だ。人が倒れている」
島「何だって！」
２人が近づいてみると、倒れていたのは金髪の美しい女性であった。生体スキャンをしてみると、生命反応は無かった。
島「もう、この人は亡くなっているみたいだな」
古代「そうみたいだな…」
２人は、亡くなった女性へ目を向けると、何やら手に握っていた。
古代「何だ、このカプセル型の装置は？」
島「通信用のカプセルみたいだな」
古代は、カプセルを回収物を収める箱に入れた。その後に、船内を調べてみたものの、墜落した衝撃で機器類は壊れてしまったらしく女性が何処から来たのかは分からなかった。観測ドームに戻った２人は回収物の報告を行なった後、ドームでの待機を命じられるのだった。

その頃、冥王星宙域では
きりしま　艦橋

電測員「巡洋艦やくも、あたご轟沈。駆逐艦しまかぜ大破」
応急員「艦内のシアンガスの除去、終わりました」
徳川「機関出力、６０％まで復旧」
砲雷長「第２、第５機銃使用不可」
宙雷曹「ミサイル格納庫の防火扉閉じました」
艦橋に続々とやってくる報告。その内容は、きりしま自体の被害報告が艦隊の被害報告よりも圧倒的だった。きりしまは艦隊の先頭に立ち、戦闘をしていたため中破。損害は大きいが、持ち前の防御力によって撃沈されていなかった。
沖田「我々の艦隊は、今何隻残っている？」
電測員「本艦以外は、〈ゆきかぜ〉だけです」
地球艦隊は、いまやたったの２隻となっていた。
沖田「そうか・・・撤退だ」
山南「撤退ですか・・」
山南が残念そうに呟く。
沖田「そうだ。ガミラス艦隊の殲滅は叶わなかったが、〝アマテラス〟が火星へ無事に向かうことはできた。我々は〝アマテラス〟を地球に連れ帰らなければならない」
山南「そう・・・ですね。撤退信号を〈ゆきかぜ〉に送れ」
通信士「了解」
撤退に向けての準備が開始される。
沖田「反転１８０度、取り舵一杯」
きりしまは、黒煙を靡かせ回頭し始める。

ゆきかぜ　艦橋
守「沖田さんの艦が、酷くやられてる」
ゆきかぜからも、きりしまの被害状況は見て取れた。船体には至るところに被弾の跡があり、戦闘の激しさを物語っていた。
岩津「〈きりしま〉より撤退信号です」
守「なんだって!?」

「「現時刻ヲモッテ作戦ヲ終了。コレヨリ撤退スル、我ニ続ケ」とのことです」
守「…進路そのまま。各部、戦闘体制を維持」
「!?」…
守は反転ではなく、敵艦隊に艦首を向けたまま戦闘配備を維持するように指示した。
守「〈きりしま〉は、損傷が激しい。あれじゃ満足に速度も出ないだろう。我々が〈きりしま〉に足並みを揃えても、追撃された場合逃げ切れずやられるだけだ。それなら、傷の浅い我々が撹乱して撤退する時間を稼ぐ。〈きりしま〉は、使者を地球に連れて行かなければならない。ならば、本艦が殿を務めなければならない」
守は覚悟を決めて、艦長以外には説明されていない使者の存在を話した。当然、他の乗組員は驚きを隠せない。
守「艦長、〝使者〟というのは？」
艦橋要員を代表して、岩津副長が使者について説明を求めた。
守「俺も詳しくは知らないが、地球を救うための方法を知っていて我々に伝えるためにやって来たそうだ」
誰もが驚き、言葉を失う。守の口から話されたことが事実なら、きりしま撤退のために殿を務めた方が良いのかも知れない。という気持ちが芽生え始める。
岩津「その〝使者〟を地球に連れて行くのは、〈きりしま〉にしかできませんね」

きりしま　艦橋
操舵手「１８０度、回頭完了」
きりしまの撤退準備は完了した。あとはゆきかぜと共に撤退をするのみ。
電測員「〈ゆきかぜ〉反転せず!!」
沖田「何っ、すぐに通信を繋げ!!」
通信士「はっ」
通信士がゆきかぜと通信を繋ぐ。メインモニターには、守の姿が映

る。
沖田「古代、撤退だ。わしに続け」
守「沖田さん、僕は逃げません。ここで逃げたら、死んでいった者達に顔向け出来ません。」
沖田「多くの犠牲を払ったが作戦は成功したのだ。明日の勝利のために、今日の屈辱に耐えるのだ。それが男だ」
沖田は、守に撤退するように訴える。
守「ここで逃げても、敵が追跡して来たら地球艦隊は全滅するだけです。〈きりしま〉には大切な任務があるでしょう。ここで撃沈させる訳にはいきません。ですから、我々が殿として撤退を援護します。沖田さん、地球は貴方を必要としています」
沖田「古代、それはお前も同じなのだぞ!!」
守「それは、仲間への手向けとして自分が預かって参ります。ありがとうございます」
沖田「古代!!」
守「お元気で。地球のことは頼みます」
通信は途切れ、ゆきかぜは敵艦隊へ突入して行った。
山南「提督…」
沖田「山南君、進路そのまま」
山南「進路そのまま」
沖田の指示を受け、きりしまは撤退に移る。
山南「機関長、第3戦速へ」
徳川「了解した。機関、第3戦速」
徐々に速度を上げ、冥王星域を離れて行く。
沖田（死ぬなよ、古代）

ゆきかぜ　艦橋
守「みんな、済まない。俺だけで決めてしまって」
守は、艦橋要員の顔を一人一人見渡す。彼らの顔はいつものように戦いに行く時と一緒だった。誰一人として守を責めること無く、彼の

判断を受け入れたようだ。
岩津「さあて、奴らに一発蹴りを入れに行くとしますか」
気合いを入れ直すため制帽を被り直し、守へ視線を向けるクルー達。彼らの表情には、迷いは無かった。
守「みんな・・」
岩津「我々は、艦長の指示に従います」
守は涙を振り払い、自らに気合いを入れる意味を込めて指示を出す。
守「全砲門開け!!　目標、ガミラス艦隊」
ゆきかぜに搭載された全ての武装が、敵艦を睨み付ける。
通信士「銀河水平　波間を越えて　目指す恒星ケンタウリ」
操舵手「星の瞬き、遥かに越えて宇宙に輝く星の船」
岩津「抜錨、船出だ　錨を揚げろ」
砲雷長「進路そのまま　よーそろー星に向かって舵を切れ」
「　俺たちゃ宇宙の、俺たちゃ宇宙の船乗りだ」
乗員の一人が口ずさんだ、〝銀河航路〟の歌詞をその他の乗員も口ずさんでいく。
砲火を掻い潜り、敵艦に被害を与えていくゆきかぜ。だが、多方向からの攻撃を全て回避する事は出来ず、艦尾へと被弾。さらに、もう一発被弾すると大きな爆発が起きた。そこから、ゆきかぜがどうなったかは確認されていない。

3週間後

火星　観測ドーム
古代「そろそろ時間だな」
士M「ああ。古代、そっちの方はどうだ?」
古代「準備なら終わった。いつでも行けるぞ」

古代・島の２人は火星での任務が終わり地球へ帰還するために、冥王星から戻って来る艦船に便乗するように命じられていた。
島「よし。じゃあ行くか」
古代「おう」
観測ドームの主要電源が落とされた。手動式のエアロック式のハッチから外へ出る。あらかじめ、格納庫から出していた１００式偵察機に乗り込む。地球へ持ち帰る大事な資料を含め、全ての荷物も積み込まれた。
古代「１００式発進」
エンジンを吹かして、１００式偵察機は飛び立った。
島「やっと、地球へ帰還か～」
後部席に座る島が呟いた。
古代「そうだな。この３週間、短いようで長かったような気がするな」
島「俺がいない間、母さんと次郎は元気にしてたかな？」
島は、地球にいる母親と弟のことを案じていた。
古代「きっと元気にしてるさ」
２人は、地球への帰還に胸を踊らせながら指定ポイントへと向かった。

島「レーダーに感あり、艦船を確認。」
古代「あれだな」
レーダーの捉えた艦船に向かって近づいて行く。ある一定の距離まで近づくと、オートパイロットに切り替えて収容されるのを待つ。
島「あとは、オートで”きりしま”に収容だな」
古代は辺りを見渡す。そこにいたのは、艦隊旗艦であるきりしまのみだった
古代「他の艦がいない。〈ゆきかぜ〉は？」
古代の頭を一抹の不安がよぎる。
島「古代、機関不調で放棄されていて〈きりしま〉に移乗している

かもしれない」
古代「だと良いんだが……」
島が励ましてくれたものの、不安は拭えないままであった。

きりしま　艦内
１００式偵察機がら降りた古代と島は、火星で採取したサンプルデータと例のカプセルを渡すために主計室前にいた。
島「これが、採取したデータ類です」
「ご苦労だった」
手渡された主計長は、部屋に入り書類の作成に取りかかろうとする。そこへ、古代が声をかけた。
古代「あの、すみません。〈ゆきかぜ〉は、〈ゆきかぜ〉はどうなったのでありますか？」
突然の質問に、困惑する主計長。
島「〈ゆきかぜ〉の艦長は、こいつの兄貴なんです」
そこへ、島が捕捉を入れる。目の前の青年の兄が駆逐艦〈ゆきかぜ〉の艦長であり、〈ゆきかぜ〉の姿がいないため、安否を確認したいという事を理解した。……
主計長「そうか……。〈ゆきかぜ〉は残念ながら……」
古代「そうですか……」
古代は礼をすると、自らに宛てられた部屋を目指して歩いた。
きりしま　艦橋
操舵手「回避完了」
電測員「遊星爆弾は、衝突コースを進行中」
操舵手「本艦は、月軌道を通過。間もなく地球周回軌道に入ります」
沖田（もう駄目だ。我々に遊星爆弾を防ぐ力はもう無い。あの醜い惑星が、我々の母なる地球の姿だとはな……）
きりしまの進む先にあるのは、我らが母星〝地球〟。そんな地球は水の惑星とも呼ばれていた。人類初の宇宙飛行士のガガーリンは、地球を見て〝地球は青かった〟という感想を残している。そんな生命が誕生した奇跡の惑星、地球。だが、地球は死の惑星になっていた。

沖田（見ておれガミラスめ。貴様らの遊星爆弾によって変わってしまった地球を救うことができるなら、わしは例え最後の一人になっても戦うぞ。この命ある限り）

西暦２１９９年、地球はガミラスと名乗る惑星国家による侵略を受けていた。冥王星から撃ち込まれる遊星爆弾によって大気は放射能汚染されてしまっている。大地は赤く焼け、海は干上がり、かつての青い姿は今や無い。人類は地下都市を築いて汚染から逃れていたが、地下都市でも放射能汚染が始まっていた。科学者によると約１年後には、地球は人類が生存が不可能な環境になってしまうと言われている。このまま人類は、終焉を迎えるのを待つしかないのだろうか・・・・・。

第3話　帰還

東京湾　地下ドック

冥王星での戦いを終えた宇宙戦艦きりしまは、地下基地のドックに入渠した。かつては、多くの艦艇で一杯だったドックも今では数隻だけ。その艦艇たちは、ガミラスとの戦いで損傷し入渠したものの、修理に必要なら資材が不足しているために放置されていた。主砲が外されたままの駆逐艦や、舷側装甲板に穴が空いたままの巡洋艦などちらほら。極東基地の艦隊は壊滅寸前ーー。いや、世界各地の防衛軍の艦隊の全てが壊滅寸前なのだ。

さらに、それらを動かす軍人の数も不足している。訓練生が一人前になるには、多額の費用と時間が懸かる。さらに、訓練生を指導する教官の数も足りないのだ。これは、全線で戦える軍人の数が減ったためにやむを得ず、訓練学校の教官も全線に異動となり、戦死してしまったためだ。資材がなければ修理が出来ない。人がいないから修理しても、動かせる人がいないという負のスパイラルだ。

きりしまを退艦した負傷者は病院区画に直行することになっていた。一方の便乗した古代と島は、宿舎へ戻ろうとしていた。ドックから防衛軍の建物に繋がるエレベーターに乗る。エレベーターには放射線の汚染レベルを示す計器が取り付けられている。その計器は、汚染が進んでいることを示していた。

島「見ろよ、古代。汚染はもうここまで来ているぜ」

古代「本当だ、このままじゃ地球はおしまいだ」

計器を見つめる古代。

古代「悔しい。兄さんの命を奪った、ガミラスが憎い」

島「古代…」

エレベーターを出たところで、とある話声が古代と島のもとへ聞こえてきた。

士官「酷い戦いだったみたいだな」

「ああ。こちらの攻撃は通用せず、あちらの攻撃は通用する。僚艦が次々と沈められたんだ。一方的な戦いだったよ」

話の内容から察するに、どうやらきりしまの乗組員と、同期の軍人らしい。
士官「〈きりしま〉の損害も酷かったようじゃないか。良く生きて帰って来れたな」
「それなんだが、味方が庇ってくれたそうだ。え～っと確か〈ゆきかぜ〉って名前の艦だったかな？そいつが、敵艦隊に突撃して、撤退の時間を稼いでくれたんだ」
「突撃?!」
古代「君、その話は本当なのか？」
いてもたってもいられなくなった古代は、話が本当か確かめるために問い詰めた。
「えっ、あっ、その」
古代「どうなんだ？話してくれ！」
士官「貴様は何者だ!!」
当然ながら、もう一人は古代の行動を咎める。
島「俺達もメ号作戦の帰還兵さ。そいつは、この戦いで兄が戦死したんだ。許してやってくれ」
そこへ、すかさず島がフォローに入る。
古代「…済まない。つい」
「俺は艦橋要員じゃないが、他の乗員が艦橋要員から聞いたらしい」
古代「そうか…。今、艦隊司令はどこにいる？」
「沖田提督は病院区画だろうよ。負傷の手当てがどうとかって言ってたからな」
そう言うと二人話して去って行った。
古代「島、俺は病院区画に行く」
島「いや、今行くのはまずいだろ。手当てを受けているんだぞ」
古代「でも、俺は事実を知りたいんだ！」
そう言うと、古代は病院区画の方向に向かう。
島「おい、待てよ！」
島の制止を聞くことなく、病院区画目指して歩いて行った。
古代「面倒なことにならなければいいが…」

島も古代の後を追いかけるのだった。
東京都　中央病院
佐渡「この負傷で大事に至らんかったのは、不幸中の幸いですぞ」
沖田は、主治医の佐渡酒造が勤務する中央病院で診察を受けていた。診察室には沖田と佐渡の他に、看護師の原田真琴と、沖田の同期の土方竜がいた。
沖田「なあに。わしには宇宙一の名医がついておる」
佐渡「まあ、そうでもあるがの。」
真琴「これで手当ては済みました」
真琴が手当てが終わったことを伝える。
土方「沖田、カプセルの解析は現在7割が完了している」
土方が例のカプセルの解析状況を説明していた時だった。病室の外が騒がしくなる。なにやら看護師と男が揉めているようだ。
看護師「今は診察中です、勝手に入られたら困ります」
診察室の扉が開き、古代が診察室に入ってきた。
佐渡「なんじゃ、騒々しいの」
古代「艦隊司令にお聞きします。〈ゆきかぜ〉が敵艦隊に突撃したというのは本当なんですか!!」
古代が沖田に突っかかる。
土方「馬鹿者、ここは病院だ!!病院で騒ぐ奴がおるか」
土方が古代を叱責する。古代の後を追ってきた島は頭を押さえた。
島（土方先生がいるじゃないか!!最悪だ…）
土方が沖田に説明する…
古代「済まん、俺の教え子だ」
沖田「君、名前は？」
古代「古代進です」
沖田「古代…。そうか、〈ゆきかぜ〉の」
古代「教えてください。〈ゆきかぜ〉が突撃したのは本当なんですか？」
数秒の沈黙、沖田は古代に目を合わせ口を開いた。
沖田「本当の事だ。彼は立派な男だった、わしの力が足りなかった

せいで彼を死なせてしまった。済まない…」
沖田は古代に頭を下げた。
土方「沖田…」
古代「自分は納得出来ません!!兄が死んだなんて…」
診察室に重苦しい空気が流れる。
佐渡「まあまあ二人とも、少し酒でも飲んでだなぁ」
何処から取り出したのだろうか。いつの間にか、佐渡の手には日本酒の瓶が握られていた。
真琴「先生、なに患者さんにお酒を薦めているんですか!!それに今は勤務中です。お酒は没収します」
佐渡「ああ～～」
当然、お酒は没収されてしまう。重い空気を変えようとしたのか、ただお酒が飲みたいだけだったのか。佐渡は酒豪なので、古代と沖田にお酒を飲ませて自分も飲みたかっただけかもしれない。
土方「古代、ちょっとこっちに来い!!島、お前もだ!」
島「えっ?（とばっちりだー!）」
診察室に乱入した古代は勿論、止めることのできなかった島も土方に連れていかれた。
防衛軍　基地航空機格納庫
古代と島の二人は、罰として格納庫の清掃を命じられていた。
古代「済まん、島」
島「じゃあ、そのうち何かで返してくれ」
古代「ああ」
島「しかし、あそこで土方先生と会うとはねえ。沖田提督と防衛大学校で同期だったらしいよ」
話をしながら掃除をしていると、古代は一機の航空機をじっと見ていた。
古代「なんだ、こいつは?」
島「初めて見る機体だな」
その機体は二人乗りで、機首部にパルスレーザー機関砲が6門載っていた。

古代「機銃６門か、かなりの重武装だな」
島「座席は２つ。こんな二人乗りの戦闘機なんて今まで見たか？」
古代「いや、初めてだ」
２人が掃除の手を止め、あれこれ考えていると▪▪。
「そいつは、コスモスパロー。偵察機さ」
不意に声をかけられた。声のした方向に視線を向けるとパイロットスーツにジャケットを羽織った丸刈りの青年がいた。
古代「貴方は？」
加藤「おっと、まずは名乗るべきだったな。俺は加藤三郎。よろしくな」
古代「古代進です」
島「島大介です」
加藤「古代と島か。よろしくな」
簡単に自己紹介をした後に〈コスモスパロー〉について話を戻す。
島「こいつは偵察機なんですよね。でも、偵察機としてはかなり重武装ですよ」
加藤「今は迎撃機として運用しているからな」
古代「どうしてです？」
加藤「迎撃機が足りないのと、偵察任務自体が無くなったからだ」
島「そんな理由で」
古代「こいつで、空戦は出来るんですか？」
加藤「いや、こいつは一撃離脱戦法による迎撃を主に行う。こいつは、元は高速偵察機だからな。後部機銃を撤去して、機首部に機関砲を搭載してある。だが、格闘性能は戦闘機に劣る。だからこそ、一気に接近して銃撃し逃げる。そうやって戦うのさ」
古代「なるほど▪」
加藤「ところで、▪お前さん達はここで何をしてた？」
島「ちょっとした懲罰と言いますか▪▪」
加藤「ああ～俺も新人の頃によく受けた」
三人で談笑しながら、清掃を再開すると
「加藤隊長、いらっしゃいませんか？」

誰かが加藤を呼ぶ声が聞こえてきた。
加藤「そろそろ行かないと。じゃ、懲罰の清掃頑張れよ」
そう言うと、加藤は格納庫を出て行った。二人が掃除を再開して2時間。指定されたスペースの掃除がついに終わった。
島「やっと終わった～」
古代「島、お疲れ。道具は俺が片付ける」
島「おっ。サンキュー」
掃除道具を元の場所に戻して、一息つく二人。
そこへ非常警報と放送が流れる。
「ガミラス軍の偵察機が防空圏内に侵入。各航空隊は直ちに出撃せよ。敵機の進路は北緯３０度４３分、東経１２８度４分。九州の南方、坊の岬沖と思われる。」
放送が鳴り響くと、格納庫に航空隊の隊員と思われる人が続々とやって来る。
加藤「お前ら、準備急げよ。」
そこには、先程出会った加藤の姿がいた。古代は加藤に駆け寄った。
古代「加藤さん、俺も出撃します」
突然すぎる古代の言葉に困惑する加藤。
加藤「何を言ってるんだ、お前さんには関係無いことだ。第一、戦闘機に乗ったことあるのか？」
古代「あります。訓練学校では戦術科を首席卒業しました。航空部門の試験はすべて一番の成績でした。」
加藤「学校で成績優秀だったからって、戦力になるとは限らねぇ。戦場ってのは経験がモノを言うんだ」
古代「大丈夫です。ガミラスの戦闘機や偵察機と何度か空戦をした経験はあります。それにこういう非常事態の時こそ、一人でもいるといないじゃ違うと思います」
古代の強気な姿勢に加藤は、黙ってしまう。
加藤「良いんだな？」
古代「はい」

古代と加藤の視線が交錯する。
島「じゃあ、俺も行くぜ。古代」
古代「島」
加藤「分かった。じゃあ、お前にも迎撃する加わって貰う。機体の数が少ないから〈コスモスパロー〉での迎撃を任せる」
古代「分かりました」
加藤「行くぞ、出撃だ!!」
二人は、加藤から予備のヘルメットを受け取り機体へ乗り込む。古代が操縦席、島が偵察席に座る。発進ゲートが開き、迎撃機が次から次へと飛び立って行く。
古代「行くぞ、島!!」
島「頼むぜ、古代」
コスモスパローに搭乗した古代と島。機体は発進カタパルトに固定される。
古代「こちら古代、いつでも行けます」
「こちら、管制室。了解した」
発進する前にエンジンを吹かす。油圧式カタパルトが機体を押し出す。カタパルトによって加速した機体は、空へと舞い上がった。
古代「今までの機体と全然違う」
これまで古代が乗ってきた機体とはスピードが段違いであった。機体はぐんぐん空を昇って行く。
古代「これだけの性能なら一撃離脱戦法での迎撃も可能か」
加藤「どうだ、〈コスモスパロー〉は」
加藤からの無線が入る。
古代「速度が今までのものよりとは桁違いです」
加藤「そうだろう。だが、お前さんの操縦センスはなかなかのもんだ。機体の揺れが小さい。十分に乗りこなせている証拠だ」
古代「隊長にそう言って貰えて光栄です」
加藤率いるブラックタイガー隊も、見事な編隊を組んで飛行する。
島「さて、敵さんに会いに行きますか」
古代「ＳＩＤ、案内を頼む」

ＳＩＤ「只今より案内を開始します」
機体に搭載されたＳＩＤのナビを頼りに、彼らは戦場へと急行して行った。

第４話　沈没戦艦

発進してから飛び続けること1時間。ＳＩＤに送られて来る情報をもとに偵察機の捜索が開始された。司令部は偵察機の到達予測地点を送ってきたが、もちろん予測でしかないので、偵察機を見つけるために散開しての索敵を行うと決めていた。

加藤「よし、ここから捜索を開始する。散開っ!!」

「「了解」」

加藤の号令を受け、散らばって鹿児島～沖縄間の東シナ海を重点的に捜索が行われる。

古代「一体、どこにいるんだ？」

島「とりあえず、最初の情報を頼りに地道に探すしかないだろ」

古代と島は、司令部が予測した北緯３０度４３分・東経１２８度４分を目指す。コスモスパローの高速を生かして、ものの5分で予測地点に到着し索敵を始めた。計器を見て機位を確認しながら飛行する。古代は目視で、島がレーダーで周囲の様子を見る。

古代「何だあれは？」

ふと、古代が視線を上空に向ける。

島「どうした？古代」

古代「今、何か光ったような気がするんだ」

島「本当か？」

古代「間違いない。一瞬だけだったが、光ったのは確かだ」

島「なら、その方向行ってみよう」

古代「上昇するから気を付けてくれよ」

機体に搭載されたレーダーに反応がないか見てみると、なにやら飛行機らしき反応があった。

島「古代、反応あり。航空機のようだな」

古代「本当か！」

島「ああ、それが、ガミラスの偵察機か別の基地から発進した迎撃機なのか」

古代「ＳＩＤ、識別を頼む」

ＳＩＤ「了解、識別を開始します」
ＳＩＤが識別を開始する。これが偵察機なら大当たり、迎撃機なら振り出しに戻ることになる。
ＳＩＤ「機体の識別ナンバー不明、未確認機と認定します」
ＳＩＤが未確認の機体であると伝えてきた。つまり、偵察機であることが確定した。古代は、操縦捍を引いた。上昇する機体はやはりこれまでの機体と比べても、スピードは抜群であった。あっという間に高度４５００ｍまで上昇し辺りを見渡す。
島「どうだ、古代。何かいたか？」
古代「いた!!」
雲の中から機体が現れる。機体と翼が一体化したような機体が特徴的な姿。間違いなくガミラス軍の偵察機だった。敵の死角になりやすい下後方より、接近してパルスレーザー機関砲をお見舞いする。
古代「食らえっ」
機首に集中搭載したパルスレーザー機関砲が火を吹く。撃ち出されたエネルギー弾は、機体に吸い寄せられるように直進する。だが、流石は偵察機。寸でのところで気付かれ、回避行動を取られてしまった。
古代（上手いな、あのパイロット）
銃弾の避けかただけでパイロットの技量の高さが伺い知れる。情報を持ち帰るために逃げ足の速さが唯一の武器である機体は、パルスレーザーを必要最小限の動きをして避けていく。
古代「逃がすか!!」
偵察機を追い続ける。空戦は不得手でも、速度は折り紙付きのコスモスパロー。ブーストで偵察機が離脱しようとしてもすぐに距離を詰める。撃っては避けられ、撃っては避けられの繰り返し。
古代「これで終わりだっ」
追いかけ続けること１０分。ついにパルスレーザーの射程距離に捉える。古代が操縦捍の銃撃ボタンを押そうとした時だった。
ビー　ビー　ビー　ビー
「??」

突如として警報が鳴り始め、機体が振動する。次の瞬間には、エンジンが煙を吹いた。
島「何だ?!」
ＳＩＤ「警告、警告。エンジンがオーバーヒートしています。このまま飛行することは不可能です。急ぎ、着陸してください」
古代「そんな」
ここに来て、エンジンがオーバーヒートしたようだ。連続での高速飛行によって、冷却が追い付かず異常が出てしまったようだ。
島「古代、着陸出来そうな場所を探してくれ。メーデーは俺が打つ」
古代「任せる」
エンジンを停止させ、滑空する。操縦捍を動かし、舵が動くのを確認した。
島「メーデー、メーデー、こちらソードスリー。エンジントラブルにより不時着する。救援を求む」
救援要請を発しながら、コスモスパローは地上に墜ちていった。

古代「いててて…」
島「なんとか助かったみたいだな」
周囲を見渡すと、火星と同じ様な真っ赤な大地が眼前に広がっていた。
島「ナイス着陸」
不時着に成功し、機体を降りて外の様子を見る。
島「あーあー。こりゃあ怒られるなあ」
不時着に成功したものの機体は損傷。特に右主翼は根元から折れてしまっていた。これでは飛べそうにない。
島「救援が来るまで待つしかないか…」
古代「しかし、なんでガミラスはこんなところに?」
島「偵察するような物なんて、ある訳無いのにな」

周囲を見渡しても、赤く焼けた大地が広がるのみ。ここまで来て偵察するような物があるのだろうか。
島「おい、古代。こっちに来てくれ！」
古代「どうした？」
島「いいから、早く」
小さな坂を上りて、島の見ていた方角に視線を向ける
古代「あれは…」
遊星爆弾によって干上がった海。そこには、軍艦の残骸が佇んでいた。その艦の名は〝戦艦大和〟。日本海軍が造り上げた最強の戦艦であった。
古代「あれは、大昔に沈んだ戦艦の残骸じゃないか!!」
島「敵は、あれを偵察しに来ていたのか？」
古代「一体、何のために…」
防衛軍極東基地・司令室・
司令部職員「敵機、空域より離脱して行きました。どうやら、逃げられた模様」
司令部では、レーダースクリーンに映る飛行物体の様子を監視していた。各基地から迎撃機が出動したものの、余りにも速すぎたためにほとんどが攻撃出来ず取り逃がしたようだった。
土方「気付かれたか…」
沖田「もう後が無いということだ」
そこへ、病院での診察と手当てを終えた沖田が司令室へやって来た。沖田へ藤堂が声をかける。
藤堂「沖田君、怪我は大丈夫なのかね？」
沖田「主治医が大丈夫と言ってくれました。ところで長官、例のカプセルの解析は？」
藤堂「ああ、解析は完了している」
技術士官「どうぞ、こちらへ。」
技量士官に案内される高官たち。
技術士官「音声メッセージをお聞きになりますか？」
藤堂「頼む」

士官は解析装置を操作し、音声メッセージの再生準備入った。装置には、古代たちが火星から持ち帰ったカプセルが設置場所されていた。

技術士官「では、再生します」

カプセルに記録されたメッセージがどのような内容かは不明である。アマテラスのメッセージとは、一体どのような内容なのだろうか・・・・。

第５話　発動、ヤマト計画

解析装置にセットされたカプセルに収録されたメッセージの再生が開始される。

「私は、イスカンダルのスターシア。あなた方の星、地球は今まさにガミラスの手によって滅亡の淵に立たされています。私はそれを憂い、１年前に地球へ使者を送りました。もし、地球を救いたいという思いがあるのならば、イスカンダルに来て下さい。イスカンダルには放射能を除去するシステムがあります。本当なら、私たちが地球に届けることができれば良いのですが、それが出来ません。ですから一番目の使者に恒星間航行用の機関である〝波動エンジン〟の設計図を託しました。そして、私の妹サーシャを二番目の使者として送りました。もし、このメッセージをご覧になっている時には、サーシャが地球にたどり着いたということですね。この時には波動エンジンが完成した頃でしょう。イスカンダルは、地球を離れること１４万８０００光年。マゼラン銀河の恒星サレザーの第４番惑星です。私は、貴殿方が未知の困難を乗り越え、イスカンダルへ来ると信じています」

メッセージが終了し、沈黙が訪れる。このメッセージをどのように受けとれば良いのか分からずにいた。イスカンダルは放射能を除去する装置を提供すると申し出てくれた。これは喜ばしいことである。だが、本当に地球を救う事が出来るのかは分からない。人類が生存可能な一年以内にイスカンダルに行って装置を受け取り、戻って来て使わなければならないのだ。

藤堂「諸君らはどう思う？」

藤堂が沖田、土方に意見を求める。

沖田「長官、わしは信じます。地球を救う可能性が一つでもあるのならば」

土方「長官、私も同じです」
二人はこのメッセージを信じると言い切った。前人未到の１４万８０００光年という航海に挑み、イスカンダルへ赴いて放射能除去装置を受け取りに行くと。
藤堂「他の者はどう思う？どんな意見でも構わない」
藤堂は、参謀達にも意見を求めた。
参謀「長官。これは、〝イズモ計画〟より成功率は高いと思います」
一人の参謀が代表して発言する。参謀達もイスカンダルへの航海に賛成の意を示した。
現在、防衛軍は選ばれし人間だけで地球を脱出し他の惑星に移民する〝イズモ計画〟が進められていた。イズモ計画と今回のメッセージ。どちらを採るかによって人類の未来を大きく左右する。
藤堂「分かった。イズモ計画のメンバーをすぐに第１ホールに召集してくれ」
藤堂の指示を受け、司令部の職員が動き出す。

その頃、古代と島は病院にて検査を受けていた。軍の制服の上からパイロット用スーツとヘルメットでは、防護服のように放射線から身を守ることは出来ない。救命艇に収容されて帰還すると、すぐに放射能を除去するための部屋に入れられた。除染が終わると、病院の放射線測定のための部屋に連れていかれた。そして、今は検査結果待ちである。真琴が結果の書かれた用紙を佐渡に手渡す。佐渡はその書類を見て
佐渡「放射線は、問題無い数値じゃのう」
開口一番、そう言った。
古代「本当ですか？」
佐渡「ああ、体に影響は無い数値だから大丈夫じゃろ。アルコール消毒でもどうかの？」
島「染みそう～遠慮します」
問題無しと言われ、ほっと息をつく。
佐渡「そう言えば、お前さん達に召集が掛かっとるよ」

島「そうなんですか？」
佐渡「そうじゃな。というか、ここにおる者全員じゃな」
古代「それで、いつですか？」
佐渡「1時間後じゃ。場所は、防衛軍本部第1ホールとなっておる」
古代「こうしちゃいられない。島、急ごう」
島「そうだな。先生ありがとうございました」
古代「ありがとうございました」
二人は病室を出て行った。
佐渡「さて、真琴。わしらも準備と行くか」

その頃、月軌道にはガミラス軍の高速空母がいた。
ポルメリア級　艦橋
観測員「艦長、画像の解析結果が出ました」
艦長「報告せよ」
観測員「はっ。北緯４８度３０分・東経１２８度４８分に存在する物体ですが、金属でできていることが確認できました。塔のような構造物には、レーダーのような金網と、測距儀らしき物を確認。砲身の付いた砲塔のようなものが見られました。外観はかなり傷んでいますが、熱源反応が周囲から確認できました。」
士官が艦長に、偵察機が撮ってきたデータの解析した結果を報告する。
艦長「見た限りだと、ただの残骸ではないか」
観測員「ええ。ですが、熱源反応がありますので、恐らくあの周辺の地下にテロンの基地があるか、あの沈没船に何か秘密があると思われます」
思いもよらない報告に驚く艦長。これからどう行動すべきか思案する。
飛行長「攻撃いたしますか？」
航空隊をまとめる隊長が攻撃隊を出すことを提案する。
艦長「待て、我々の任務はテロン軍の監視にある。ここで下手に行動すれば、後の作戦に侵攻にどんな影響があるか分からない。リスク

を犯して行動するより、まずは報告だ。シュルツ司令からの命令を待って行動する」
まずは、冥王星基地に報告し指示を仰ぐことにした。
艦長「通信長、冥王星基地に報告の打電を頼む」
通信員「了解しました」
防衛軍司令部
時刻は午後７時。防衛軍の大ホールには、召集された軍人達が集まっていた。
「ついに、イズモ計画の発令か」
「地球脱出用の宇宙船が完成したのか」
集まった軍人達は口々にそう話していた。
古代（とうとう、地球を見捨てるのか・・・）
島「どうした古代？」
黙って壇上を見つめる古代に声を掛ける島。
古代「いや、何でも無い」
島「そうか」
会場は、溢れんばかりの人で埋め尽くされていた。
島「見ろよ、古代。沖田提督だ」
壇上には沖田が姿を現す。全員が沖田に敬礼をし、沖田が答礼をする。
沖田「諸君、良く集まってくれた。イズモ計画の選抜メンバーとしてこれまでの厳しい訓練、誠にご苦労であった。その君たちへ正式に通達する。君たちの任務は、地球を救うために１４万８０００光年の旅に出てもらう」
沖田の発表に会場ではざわめきが起きる。それもそのはず地球を脱出しての移民から、１４万８０００光年の旅に出るなどいきなり聞かされたら驚くのも無理はない。
沖田「静粛に!!これは周知の通り、地球を脱出・移民と目的としたものでは無い。先日のメ号作戦において回収されたカプセルに記録されていたメッセージを刮目してほしい」
「私は、イスカンダルのスターシア・・・」
・・・・

すると突然、メッセージが流れると同時に部屋が暗くなり天井や壁に無数の小さな光が映し出された。その光は、少しづつ集まり始めた。初めは、何が形成されているのか分からなかった。目を凝らして見てみると・・・

島「これは、俺たちの天の川銀河じゃないか」

古代「本当か、島」

島「ああ、訓練学校時代に何度も見てきたからな」

小さな光は、空中に銀河を描き出した。・・

「・・放射線を除去するシステムがあります・・」

放射能汚染された地球を救う方法があると知り、会場内のざわめきが大きくなる。

「・・サーシャを二番目の使者として送りました・・」

空間には、古代と島が火星で発見した宇宙船が飛行している様子が見られた。

古代・島（（俺たちが、火星で出会った人がサーシャさんだったのか））

「・・私は、貴殿方が未知の苦難を乗り越え、イスカンダルへ来ると信じています」

メッセージが終わり、部屋が明るくなる。

沖田「このメッセージにあったように、我々はイスカンダルからの技術供与により波動エンジンを搭載した宇宙船を完成させている。諸君らはその宇宙船の乗組員として、往復２９万６０００光年の旅に出てもらう。但し、この命令は強制では無い。地球に残りたい者は辞退してもらって構わない。以上だ」

命令は強制では無く、志願制であることを伝え、沖田は壇上から降り、変わりに金髪の女性がマイクを捕る。

雪「集合等の前に、各部門の責任者を読み上げます。艦長　沖田十三。戦術科　戦術長　古代進。砲雷長　南部康夫。航空隊隊長　加藤三郎。航海科　航海長　島大介。気象長　太田健二郎。技術科　技師長　真田志郎。なお、真田少佐は副長兼任となります。情報長　新見薫。掌板長　榎本勇。機関科　機関長　徳川彦左衛門。機関助

手　山崎奨。船務科　通信長　相原義一。主計長　平田一。炊事長Ｋ・新谷。そして、私が船務長を勤める森雪です」

壇上で発表された人事。その中で、古代は戦術科の総責任者に。島は、航海長に就任するということが告げられた。

雪「集合についてですが、明日０１：００に防衛軍司令本部の第２駐車場に集合してください。移動用の車両が待機しています。辞退される方は、司令部へ２３：５９まで辞表を提出して下さい。連絡は以上になります」

解散が告げられ、ホールを後にし、それぞれが宿舎や自宅に戻り、荷物の準備を始めた。家族と過ごす最後の日になるかもしれない。準備を終えた者は、残りの時間を思い思いに過ごすのだった。

第６話　甦れ、宇宙戦艦ヤマト

現在の時刻は２３：００。家や宿舎を出て集合場所に向かい始める時間帯。古代も部屋を出て行こうと最後の確認を行う。戸締まりを確認し、荷物を持ってリビングに戻って来ると、さっきまで見ていたテレビではニュースが放送されていた。ニュースでは、政府が発表したヤマト計画に反発する市民のデモの様子が流れていた。インタビューに答える男性はこう話す。

「奴らは選ばれた人間だけで、地球から逃げ出すつもりなんだ!!」

テレビを消し、愛用のハーモニカを手に取り、コルクボードに飾っている家族の写真の前に立つ。両親は遊星爆弾によって６年前に亡くなり、兄の守は先日の冥王星の戦いで亡くなった。

古代「父さん、母さん、兄さん、行って来るよ」

写真に写る家族に別れを告げ、部屋を後にした。

船務長の森雪は、家族にヤマトに乗艦する事を伝えた。一方の両親は、一人娘の雪を遠い宇宙に行かせる事に反対であった。

母親「雪、どうしても行かなくちゃならないのかい？」

目に涙を溜め、雪を抱きしめながら訴える。雪は両親に目を合わせ、自然に話す。

雪「お母さん、さよならなんて言わないわ。行って参ります。そして、必ず帰って来ます。お父さんも、元気でいてね」

両親「「雪!!」」

そう伝えると笑顔で家を出ていった。

父親「あの子が決めたことだ。行かせてやろう」

母親「あなた…」

雪を気持ちを汲んだ両親は、彼女の後ろ姿が玄関から見えなくなるまで手を振り続けたという。

防衛軍司令本部

執務室で準備を終えた沖田。荷物を纏め終えた直後、ドアがノックされる。

土方「沖田、入るぞ」

ドアが開き、現れた声の主は土方であった。
土方「沖田、本当に行くのか？」
部屋に入るなり、沖田にそう問いかける。
沖田「ああ」
土方「その体でか？」
沖田は、宇宙放射線病を患っていた。これを知る者は、主治医の佐渡と長官の藤堂のみ。土方には伝えていなかった。
土方「俺の目は節穴では無い。一体何年の付き合いだ!!身を引くことも勇気だ」
だが、土方は沖田が何らかの病を患っていることを見抜いていた。
沖田「土方。往復２９万６０００光年の旅は、わしの命を奪うことになるかもしれん。だが、わしは行く。行って必ず帰って来る。地球の青い姿を見るまで、わしは死ねん」
両者の視線が交錯する。その視線には互いの強い思いが込められていた。
土方「・・分かった。そこまで言うなら、俺からはもう何も言うまい」
沖田の強い思いを感じた土方が折れ、沖田はイスカンダルへの旅に出ることになった。
沖田「ありがとう」
土方「〝アイツ〟のことを宜しく頼む」
〝アイツ〟というのが、口にこそ出さないが古代進を指している事を察した沖田。
沖田「留守の間、地球を頼む」
土方「任せろ」
沖田が特務艦の艦長になることで、これまで務めた艦隊司令の座は、土方が引き継ぐことになる。
土方(沖田・お前が守って来た地球は、何としてでも守ってみせる)
土方も決意を新たにするのであった。
防衛軍司令長官執務室
藤堂（まさか、こんなことになるとはな）
藤堂は、1年前のことを思い出していた。ガミラスが遊星爆弾によ

る攻撃が開始されてから5年経ったある日のこと。正体不明の宇宙船が東京湾（このときには、海は干上がっていて湾ではなくなっていたが）に不時着した。それは、ガミラスの宇宙船とは異なるものであった。軍は、発見されてからすぐに調査班を編制し、解析が行われた。解析には5日を要した。調査班による解析結果の報告に立ち会った。そこには、波動エンジンの設計図を納めたカプセルと人型を模したアンドロイドが船内から発見されたと報告を受けた。そして、カプセルにはスターシャから波動エンジンについての説明と、2人目の使者を1年後に送るというものであった。波動エンジンの説明を受けた時には大きな衝撃を受けた。今の地球艦が搭載する機関よりも遙かに高性能であり、ワープ航法が可能という代物。軍は波動エンジンをイズモ計画に使う宇宙船に搭載することを決定した。これならば、地球を脱出し、移住先の惑星を見つけることができる可能性が高くなる。だが、イズモ計画は人類すべてが地球を脱出できる訳ではない。ガミラスの狙いが不明な以上、脱出した宇宙船が襲われる可能性もある。そのための武装や惑星調査用に艦載機や探索艇も搭載してあるために収容出来る人数にも限りがあった。そんな中での放射能除去装置の提供。渡りに船であるが、メッセージを信じて送り出すことにした。

藤堂（頼むぞ、沖田君）

防衛軍司令本部第2駐車場

乗車するよう指示された車両を探す島の元に1人の少年が駆けてくる。

次郎「兄ちゃんー!!」

島「次郎？どうした」

次郎「これ、母さんから」

次郎の手に握られていたのは、お守りであった。

島「お守りかぁ・・」

次郎「昔、父さんに・渡しそびれたから母さんが大介兄ちゃんには、必ず渡してくれって」

島「心配性だからなあ、母さん」
次郎「兄ちゃん、頑張ってね」
島「ああ、その代わり母さんを支えてやれよ。約束だ」
次郎「うん!!」
お守りを渡した次郎は家に帰って行く。渡されたお守りを見てみると、〝航宙安全〟と書いてある。航海の安全を願ってくれたようだ。

こうして、家族に別れを告げ集合した乗組員達は、一路東京から鹿児島まで向かった。交通規制が敷かれているため渋滞も無く着いた。鹿児島に着くと、鹿屋基地に立ち寄り最後の休憩を採る。そこで、制服が配られた。男性用の制服は上下長袖長ズボン。戦術科は白地に赤い矢印。航海科は白に緑。機関科は白にオレンジ。技術科は白に青。船務科は黄色に黒。航空隊のパイロットはその逆、黒に黄色である。整備員はオレンジ色である。女性用はスーツのような制服で、生地が各科の色となっており、矢印が黒で統一されていた。なお、衛生科の制服は、男性用が水色、女性用がピンクとなっていた。休憩が終わり、いよいよ厳重な警戒体制が敷かれた宇宙船のある工場へ向かう。
島「なあ、古代。俺たちが乗る宇宙船ってどんな奴なんだろうな?」
古代「さあな。ただ、波動エンジンを搭載しているんだ。これまでの防衛軍の宇宙船とは違うだろうよ」
長い道のりを走りながら古代と島は、新しく乗る艦について話あった。説明を聞く限りだと、かなり高性能な用だがどのような艦なのか想像もつかなかった。

坊の岬　南部重工造船所
鹿屋から走ること1時間。ついに工場へ到着した。到着してからは、作業員の案内の元、ドックへ向かう。彼らの前に現れたのは。

島「大きいな…」
古代「ああ」
そこに鎮座していたのは、巨大な船体だった。喫水線より上は土に覆われていて全貌が分からない。
「乗艦される方は、こちら第3艦橋から乗艦ください」
艦底部にある第3艦橋と呼ばれる構造物からタラップが下ろされており、そこで乗艦手続きをしていた。身分証明書を提示し、乗艦名簿と照らし合わせる。確認が終わり、乗艦が許可される。そこからは、艦内図を頼りに割り当てられた居住区画の自室へ向かう。自室で制服に着替え、各自が自分の受け持つ部署へ向かう。各階層を繋ぐエレベーターに乗り、第1艦橋へ行くためのボタンを押した。エレベーターはどんどん昇って行き、ものの十数秒で到着した。
沖田「来たか…」
第1艦橋で二人を出迎えたのは、艦長の沖田だった。
古代「戦術長を拝命しました。古代進、只今着任しました」
島「同じく、航海長を拝命しました。島大介、只今着任しました」
沖田に着任の挨拶をする二人。
沖田「私が艦長の沖田十三だ。ここが、これからお前さん達が勤務するヤマトの第1艦橋だ」
島「ヤマト…この艦の名前ですね？」
沖田「その通りだ、島。これが、宇宙戦艦ヤマトだ」
古代「艦長、この艦は完成しているんですよね？」
沖田「完成してはいるが、各種点検がまだ済んでいない」
古代・島「「ええっ」」
沖田が口にした言葉に驚く二人。
島「なぜ？」
古代「波動エンジンの点検に時間が掛かってな。それに、乗員には艦内の配置と艦に慣れて貰わなければならん。時間が無いから同時進行しなければならない」
古代「はあ…」
沖田「さて、これから君たちが勤務する第1艦橋について軽く説明

しておく。」
古代・島「「はいっ」」
沖田「いいか。ここ第1艦橋は、ヤマトの指揮中枢区画だ。ここは、主に戦闘や通常航海の指揮に使われる。いわば、ヤマトの頭脳だ」
古代「ヤマトの・・・」
島「頭脳」
沖田「古代。お前の座る戦術長席は、次元羅針盤の正面にある。そこで、各種兵装の機動や航空隊への指示が出せるようになっている」
古代「はい」
沖田「島。お前の座る航海長席は、古代の席の右側だ。そこで、ヤマトの操縦を行うようになっている。今のうちにマニュアルを呼んでおくように」
沖田「あの、古代の席の左側の席に計器がありますが、こっちは・・・」
戦術長席の左側には、島の座る航海長席と同じ計器がある。だが、大きな違いは操縦桿が無く、変わりに大きな窪みがあるのだった。
沖田「予備席だ。そっちは、ヤマトの操縦を担当する者が倒れた場合。又は、緊急時にこの艦の自律型サブコンピューターが操縦するための席だ」
島「はい」
席に置いてあったマニュアルを開き、各種計器やレバーの関係や装置の機動方法について目を通す。そこへ、誰かがやって来たようだ。第1艦橋の通路へ繋がる扉が開く。
雪「船務長を拝命しました、森雪。只今着任しました」
声のする方向へ目を向けると、そこには火星で遭遇したサーシャそっくりの女性がいた。
島「おい、古代。これは夢でも見ているのか?」
古代は、島の頬を軽く引っ張る。
古代「痛たっ」
頬に軽い痛みが走る。
古代「どうやら、夢じゃ無いみたいだな」
島「そうみたいだな」

再びマニュアルに目を通しながら話し合う。
古代「しかし、こんな偶然なんてあるんだな」
島「本当だよな。俺も見た時、火星の彼女が生き返って地球に来たのかと思った」
古代「もしかしたら、宇宙人の親戚がいたりして」
などと話し合っていると・・
雪「あの、すみません」
古代・島「「は、はい!!」」
突如、声を掛けられ驚く二人。反射的に跳び上がってしまう。
雪「あの・・。どうかしましたか？」
振り替えると先程の女性、森雪が目の前にいたのだ。
古代「い、いえ。特に何も」
島「何でもない、何でもない」
「宇宙人の親戚が～」など話していたなんて口が裂けても言えない。いくら何でも失礼だろう。全力で誤魔化しておく。
雪「そうですか」
なんとか誤魔化すことに成功した。
雪「初めまして、森雪です。艦内の運営を行う船務科の責任者を務めます。ここ第1艦橋では、主にレーダーでの監視をします。これからよろしくお願いします」
古代「俺は、戦術長を務める古代進だ。こちらこそよろしく」
島「俺は、航海長の島大介。よろしく」
雪「古代さんと島さんね、よろしく」
握手を交わす三人。挨拶を終えると、手にした端末に目を向け、なにやら確認すると沖田に報告する
雪「艦長、全員が乗艦しました。欠員はありません。現在、物資の積み込み作業は完了しています。艦載機・内火艇の搭載はまもなく完了します」
沖田「そうか・・引き続き、安全を第一に作業をするように通達してくれ」
雪「はい」

報告を終え、エレベーターで第1艦橋を下りて行く。
その頃、冥王星では
ガンツ「シュルツ司令、あの報告どう思います？」
シュルツ「ああ、あの報告か…」
ガンツ「あの残骸の正体は一体…」
シュルツ「それだ、ガンツ。地下に基地があるのか、それかあの残骸に重要な秘密があるのか見当もつかん。もう少し情報が欲しいところだ」
ガンツ「ですよね…」
会議室では、シュルツやガンツを含め士官たちが話し合いをおこなっていた。地球圏に進出して偵察任務に従事する空母からの報告を受け、対応策を練っていた。
「地球侵攻の障害は、早めに取り除くべきです！」
一人の士官の意見に他の者も頷く。
「シュルツ司令」
シュルツ「それについては異論は無い」
満場一致で攻撃を行うことに決定した。問題は次にうつる。
シュルツ「どれだけの戦力を送り込むだな…」
敵情は不足していてどんなことが起こるか分からない。偵察機が偵察活動中に沢山の迎撃機が上がって来たという。そこは、敵にとって重要な施設だあることは推察できる。そこへ、大規模な艦隊を送り出せばテロンに我々が存在に気付いていることがバレてしまい対応策を取られてしまう恐れがある。なかなか結論が出ないまま時間が経ってゆく。
ガンツ「司令、空母に攻撃させましょう。いきなり現れれば、敵を混乱させ指揮系統をマヒさせることが可能です。テロンの対応は後手に回ります。我々が出撃するより、任せた方が良いと思います」
シュルツ「そうだな。我々より現地の部隊のほうが臨機応変に戦えるかもしれん。皆、それで良いな？」
「はい」
議論の末、空母に攻撃をさせるという意見に纏まった。それから二

時間後、月面にある空間騎兵隊の演習基地が攻撃に晒された。地球への降下前に妨害を受けない為であった。基地に駐屯していた空間騎兵隊は果敢に応戦したが、対空陣地は壊滅。多数の負傷者を出していた。

月面基地

基地では、負傷者が簡易ベットで横になり手当てを受けていた。無傷な者は全体の▪位しか満たない。

看護兵「副隊長、負傷者の手当て終わりました」

斉藤「ご苦労だったな▪▪ゆっくり休め」

見張りに付く副隊長の斎藤始は、双眼望遠鏡を手に敵の監視を続ける。

看護兵として、配属された者はぐったりした様子で休憩に入った。▪にあたる隊員を手当てしたのだ、精神的にも体力的にも疲弊しているだろう。▪医療品も殆ど使いきった。ここは早く救援を呼びたいところだが▪▪。

斉藤「通信機の方はまだか？」

工作兵「駄目です。アンテナの修理にまだ時間がかかります」

工作兵が修理を続ける。襲撃で通信用アンテナが被害を受け、通信が出来なかった。

斉藤「なるべく、急いでくれ」

工作兵「了解です」

永倉「隊長、あれ見て！」

その時、同じく監視していた女性隊員、永倉志織が指を差す。

斉藤「あの野郎▪」

指差された先には▪、地球に向かって降下に入る空母の姿があった。▪

（俺達も宇宙空間で戦うことできれば▪）

彼らは、宇宙空間で戦う術を持たない▪。彼らは地上戦を専門する部隊だ。宇宙船に対して出来る事は、山砲や高射砲による迎撃に限られる。ただ、降下していいく様子を黙って見ることしか出来なかった。

第7話　号砲一発　宇宙戦艦ヤマト始動

防衛軍司令部

メインレーダーのスクリーンを見つめる電測員。そこに映っていたのは…

電測員「長官、敵空母が降下して来ます！」

藤堂「何だと!!」

降下してくるガミラスの空母が映っていた。今までは艦載機を降下させての偵察や地上攻撃をさせていたが、今回は母艦ごと降下してきた。司令室に、激震が走る。

土方「敵は、気付いたようだな…」

土方は一人呟く。どうやらガミラスは、ヤマトに気付いたようだ。

芹沢「何か、動かせる艦艇はいないか」

参謀長芹沢虎鉄が艦艇による迎撃を命じる。だが、これに返ってきた返答は…。

防衛軍職員「ドックにいる艦艇は、どれも修理が進んでいません。きりしまも応急修理が済んでいません。まともに戦うことはできないでしょう」

芹沢「くっ、このままでは…」

苦虫を潰したような表情を見せる芹沢。そこへ藤堂が口を開く。

藤堂「ヤマトに迎撃させよ」

藤堂は、ヤマトに迎撃するように命じた。この一言に、驚きの表情を浮かべる芹沢。

芹沢「しかし、現在ヤマトは出港準備中です。それに、まだ波動エンジンの点検が終わっていないとか。大丈夫なのですか？」

芹沢は、ヤマトへの出撃の指示に難色を示した。

藤堂「今、戦うことができるのはヤマトだけだ。ヤマトに賭けるしか無い。それとも、他に迎撃の案があるのかね？」

芹沢「…ございません」

藤堂「なら、急いで連絡をとりたまえ」

芹沢「はっ…。今すぐヤマトへ連絡せよ」

命令を受け、通信員が打電キーを叩く。ヤマトへ敵空母迎撃が命じられた。

一方、この時ヤマトでは積み込み作業が終わり、古代・島・雪以外の第1艦橋に勤務する人が揃って自己紹介が行われ、出港へ向けてのミーティングが開始されようとしていた。

宇宙戦艦ヤマト　第1艦橋

南部「砲雷長の南部康夫です。古代さんの指揮下で主砲や副砲をはじめとする各種兵装の管理や制御を行います」

太田「気象長の太田健二郎です。航路の監視が主な仕事になります」

相原「通信長の相原義一です。雪さんの元で通信業務を担当します」

真田「私が技師長の真田だ。これから副長も兼務していく。以後よろしく。あと、今はここにはいないが徳川機関長も出港の時にはこちらで機関の制御を行われる。その時に各自挨拶をしておいてくれ」

「「よろしくお願いします」」

軽い自己紹介を終えて、それぞれが各々の席に着く。そこへ、沖田が艦長室から下りてきた。

沖田「徳川君以外の第1艦橋要員はこれで揃ったな。私が艦長の沖田十三だ。これから君たちは私の指揮下に入ってもらう。この艦は、一人の力だけでは動かせん。皆の力があってこそ動かせる。諸君らは、力を合わせて任務に従事してくれ」

「「「はっ」」」

そこへ、一台の赤いロボットがやって来た。

南部「何なんだこいつは？」

相原と南部が怪訝そうな表情で見つめる。

「技師長、整備アリガトウゴザイマス」

ロボットは真田にお辞儀した。

真田「どうってことは無い。君は、ヤマトにとって必要な存在だか

らね」
真田もロボットに返答する。どうやら二人は知り合いのようだ。古代が声をかけた。
古代「副長」
真田「なんだい？」
古代「そいつは一体？」
真田「こいつは、ＡＵ―Ｏ９。この艦の、自律型サブコンピューターだ」
アナライザー「アナライザーと呼ンデクダサイ」
真田「元々は別のユニットが搭載する予定だったんだが、不具合が見つかってな。急遽、中央病院で利用されていたこいつをヤマトに搭載することになったんだ」
古代「中央病院？何でそんなところに」
真田「元々ＡＵユニットは工場や研究所での使用を前提に製造された解析ロボットだ。だが、ガミラスの遊星爆弾で閉鎖された施設が数多くあるのは知っているだろう。」
古代「はい」
真田「それで、働き場所を失ったロボット達が本来とは違う別の場所で利用されるようになった」
アナライザー「ワタシはソノ一例デス」
真田「それに目を付けたという訳だ。元から高性能なＡＩを登載しているから、この艦のサブコンピューターにした訳だ」
真田が説明を終えたその時、地響きと振動が艦橋を襲った。
相原「艦長、司令部より入電です。「現在ガミラス軍ノ宇宙空母ガ降下中。艦載機ニヨル空襲ニ注意シ、コレヲ迎撃セヨ」以上です」
相原が司令部からの入電を読み上げる。
沖田（この艦に気付いたか、蛆虫どもめ）
沖田は、内心毒づいた。波動エンジンの整備が終わっていない今、どこまで戦えるかどうかは不明だ。だがやるしかない
雪「艦長、本艦のレーダーでも捉えました。メインパネルに出します」

雪がレーダーで捉えた。敵艦の様子が、メインパネルに映し出される。
雪「敵空母は月軌道を離脱、降下してきます」
さらに艦載機に姿も映る。揺れの後に爆発音が響く。敵は艦載機による空襲を開始したようだ、地響きが断続的に続く。だが、沖田からの指示は無くただ黙っている。
古代「艦長、まだこの艦は戦えないんですか?このままではやられてしまいます!!」
古代が沖田に戦わないのかと問いかける。それに対し沖田の返答は…。
沖田「待て」
ただ、その一言だった。
沖田「相原、ドックの作業員に退避の指示を」
相原「了解」
退避命令が出るとすぐに作業員はドックから退避していく。
沖田「徳川君、波動エンジンは動かせるか?」
徳川「いいえ。しかし、補助エンジンなら大丈夫です」
艦橋と機関室での連絡が行われる。波動エンジンはまだ動かせないが、補助エンジンは動かせるようだ。
沖田「総員配置に付け、砲雷撃戦用意!!」
号令が掛かり、各自が己の席に付く。機関室では機関員が補助エンジンに駆け寄り、各種操作を開始する。
沖田「補助エンジン始動5秒前、重動力線コンタクト」
徳川機関長の指示の元、機関員がレバーを引く。コスモタービン改にエネルギーが入った。エンジンが唸りを上げ、動き出す。
相原「艦長、作業員の退避完了しました」
ドックにいた作業員の退避も完了したようだ。
沖田「よし。偽装解除、船体起こせー!!」
巨大な構造物に対して、艦載機による空襲を開始するポルメリア級空母。艦載機を続々と発進させる。

メルトリア級　艦橋

「艦長、第2次攻撃隊発進しました」

「第1次攻撃隊は帰還後に第3次攻撃隊として送り出す。補給準備を急げ」

「艦長、冥王星基地より命令です「艦載機ニ任セズ、降下シ攻撃セヨ」です」

「冥王星基地に「了解」と伝えてくれ。これより本艦も降下し攻撃に入る。砲撃用意!!」

降下をしながら搭載するミサイル、地上攻撃用の大口径砲の発射準備に入る。地球の大気圏内に侵入。高度を取り、目標を見失わないように進路と高度を調整しながら照準を合わせる。第1次攻撃隊として出撃していた艦載機が戻って来たため収容を開始した。格納庫でミサイルと燃料の補給の最中、思わぬ報告が飛び込んで来た。

「か、艦長!!」

「どうした?」

「あ、あれを見てください!」

メインパネルに映された映像を見たガミラス軍は、驚愕の事実を知ることになる。

「な、何だと!!」

そこに映っていたのは、動き始めた巨大な鉄の塊であった。

「艦載機の出撃と攻撃準備を急げ!!」

補給作業を急ぐように指示をする。

「エネルギー充填、開始」

艦底部に備え付けられた、大口径砲へエネルギー充填が開始される。

戦艦大和の残骸は、大きな振動と共に傾いた船体が起き上がった。船体にひびが入ると、そこから別の船が出現する。まるで、生き物が脱皮するかのように、新たな姿が顕になる。

宇宙戦艦ヤマト　第1艦橋　■？
古代「これが、あの沈没戦艦■■」
つい最近知った沈没戦艦の残骸が、自分の乗艦する宇宙船と知り、驚く古代。メインパネルには、全く別の姿が映っていた。
沖田「これが、かつての超弩級戦艦の甦った姿■■。これが、宇宙戦艦ヤマトだ」
古代「ヤマト■■■」
沖田「古代、奴■を攻撃する。ミサイル発射用意!!」
沖田が指示を出す。これから本格的に戦闘に突入するのだ。
古代「はっ。南部、ミサイル発射用意」
南部「了解。ミサイル発射用意」
兵装起動レバーを引き、起動させる。煙突を模した8連装ミサイル発射塔へ、動力となるエネルギーの供給が始まる。弾薬庫から揚弾塔で揚げられ、発射筒に装填される。
雪「現在、空母は本艦の上空。高度3万mにいます」
真田「古代、艦載機の発進中を狙え。あの空母は、四方に伸びているアームの発艦口から射出している。発進中に回避運動を取れば大事故になりかねないから動けないはずだ」
古代「了解」
真田のアドバイスを受け、狙うタイミングが決まった。
南部「ミサイル装填終わる」
古代「目標、敵空母!!」
制御室では、ミサイルの誘導のために、敵艦の座標データが入力されている。
南部「測敵よろし。自動追尾、定点固定」
古代「発射準備よし」
太田「艦載機、発進が始まりました」
発進を開始した艦載機は、編隊を組むために空母の周囲を飛行する。
古代「南部、防御弾幕セット」
南部「分かりました」

対空戦闘を担う、パルスレーザー砲が駆動する。迎撃に向け、即応体制が取られた。
沖田「攻撃始め!!」
沖田から空母への攻撃開始の号令が掛かった。
「発射始め!!」
８門の発射口からミサイルが撃ち出された。目標の空母目掛けて飛翔する。

その頃空母では、補給作業を終え艦載機の発進が開始された。
メルトリア級　艦橋
「第３次攻撃隊、発進しました」
「よし、では攻撃の準備だ。照準を合わせろ」
「はっ」
操舵手が操縦桿を握り締める。砲術長がスコープを覗いて、中心にヤマトが来るように照準を合わせる。砲術長の指示に従い、航海長が細かく進路を調整する。
「艦載機隊に、攻撃終了後すぐに退避するよう伝えろ」
「はっ」
「照準よろし。エネルギー充填完了まであと２分」
（よし、あと少しだ）
任務完了まで後僅か。一撃で仕留めようと決意した矢先だった。
「艦長、ミサイル接近が接近して来ます」
「何だと!!」
「数８。回避不可能域まで、後２０秒」
「くっ▪。回避ー!!」
スラスターを限界まで吹かして回避行動取るが、避けきれずに被弾。爆発による震動が艦を包み込む。非常警報が鳴り始めた。
「何事だ!!」
「艦底部、砲口に被弾!!」
「こちら格納庫。火災発生、これより消化に▪▪うわぁぁぁぁ」
報告を言い終える前に爆発が掻き消した。▪

「船体中央部にも被弾しました!!」
上がってくる報告に耳を傾けるが、意識を艦の状況把握に切り替える。
「被害の復旧に努めろ」
「第1・第3ブロック、隔壁閉鎖!!」
艦内で繰り返し爆発が起きる。格納庫内のミサイルに誘爆し炎が広がって行く。乗員が必死にダメージコントロールに励む、それでも食い止めることが出来なかった。
「メッセージを頼む」
通信長は通信機の録音機能を作動させた。艦長はマイクを掴み、報告内容を話す。
「シュルツ司令、あれの正体は宇宙船です。これまでの宇宙船とは違います。本艦は反撃を受け、もう艦が持ちそうにありません・・・。ガミラスに栄光あれ」
メッセージにそう言い残した。そして、空母は爆沈していった。
宇宙戦艦ヤマト　第1艦橋
雪「ミサイルの命中を確認・・・撃沈しました!!」
古代「やった!!」
南部「良しっ!!」
撃沈の報告を受け、拳を握る古代と南部。最初の脅威を退けることに成功した。
雪「敵艦載機接近」
雪の声が艦載機の接近を伝える。
古代「パルスレーザー、対空戦闘用意」
パルスレーザーの砲身が、艦載機を睨む。艦載機は高空で急降下する体制に入り、ヤマトに襲い掛かるつもりのようだ。
古代「撃ちー方始め!!」
降下開始直前に対空射撃始まった。メランカは果敢に急降下するがパルスレーザーの火線に舐められていく。たちまち機体は蜂の巣となり機体は空中で火だるまになっていく。運良く掻い潜った機体も攻撃しようとするものの、当たらない。それもそのはず、急降下前

にパルスレーザーによる掃射が始まったことにより進路を変更したためだ。小さなズレは、降下していけばいくほど大きなものになつ。それにより命中率は大きく下がる。一度目の攻撃を終え、退避しようとしたところをパルスレーザー砲によって撃ち落とされれる。艦載機は数分の対空戦闘で全て撃ち落とされた。

古代「お疲れさん。流石、主席の名は伊達じゃ無いな」

島が、古代に労いの言葉を掛ける。

古代「俺一人だけじゃない、南部のサポートのおかげだ。もし、サポートが無かったら喰らっていたかもしれない」

南部「そう言ってもらえて光栄です」

敵艦の撃沈に沸く、第1艦橋。

沖田「古代、良くやった」

古代「艦長」

沖田「諸君、ご苦労だった。各自、休憩を取るように」

そう言い残すと、艦長室へ戻って行った。

防衛軍司令本部

電測員「レーダーより敵艦の反応消失。撃沈を確認しました!!」

「「やったー!!!!」」

撃沈の報告に歓喜する防衛軍司令部。張つめていた空気が消えていく。

藤堂「危機は脱したようだな、土方君」

土方「ええ。ですが長官、敵は何をしてくるか分かりません。〈ヤマト〉の存在が敵に知られた以上、警戒は続けるべきです」

藤堂「ああ、勿論そのつもりだ」

空母を撃沈したからと言っても、まだ地球の危機が去った訳では無い。人類が生存可能な一年以内で、放射能除去装置を受け取りに往復29万8000光年の旅に行かなければならない。

藤堂「総員、警戒体制を強化せよ。どんな些細な動きも見落とすな」

「「はっ」」

新たに発せられた命令。ヤマトを護るために防衛軍は、最大級の警

戒体制を取った。ヤマトの出港は明日、地球の運命がかかった旅の始まりの日。ヤマトは、何が何でも守ってみせるという雰囲気が司令部に流れ始めた。

冥王星基地

通信員「司令、地球にて作戦中の空母からの通信が途絶えました」

シュルツは、部活からの報告黙って聞いていた。

通信員「この音声メッセージの報告が最後に通信になります」

次に、音声メッセージと一緒に送られてきた映像が再生される。そこには、鉄の塊から姿を現した宇宙船が映っていた。

ガンツ「テロンが、こんな宇宙船を作っていたなんて…」

誰もが、宇宙船の姿に言葉を失った。

ガンツ「司令、今すぐに艦隊を差し向けましょう」

ガンツが艦隊を差し向けるように進言する。

シュルツ「待て。動かぬ標的に物量を投じる必要は無い」

ガンツ「しかし!!」

シュルツ「よく見るんだ、ガンツ。あの艦は、飛んでいない。これが何を表しているか分かるか?」

ガンツ「ええと…」

画面を食い入るように見つめる。

ガンツ「そうか。まだ機関が動かせない状況にあるという訳ですね!!」

シュルツ「そうだ。我々が出向いて攻撃するより、ミサイルを撃ち込んだほうが容易い」

ガンツ「では、あれを…」

シュルツ「惑星間弾道弾の発射準備を」

ガンツ「はっ」

新たな命令が発せられた。再び、ヤマトに脅威が降りかかろうとしていた。人類滅亡まで、あと３６４日。

第８話　最後の希望

ガミラスの空母を迎撃したヤマト。乗組員は、交代で休憩をとっていた。第１艦橋でも交代要員と業務を引き継ぎ、交代した者は食堂へ向かい、食事を採っていた。

艦内食堂　ヤマト亭

ヤマトの艦内食堂、通称ヤマト亭では１０名の炊事員が働いている。３３０名の乗組員の胃袋を満たすため、最新の調理設備が揃っている。提供される食事には、艦内農園で栽培された新鮮な米や野菜を使用している。肉類や魚類といった食品は「Ｏ・Ｍ・Ｃ・Ｓ」（Ｏｒｇａｎｉｃ　Ｍａｔｅｒｉａｌ　Ｃｙｃｌｅ　ｓｙｓｔｅｍ　）と呼ばれる食料供給システムによって供給されたものを使っている。とはいえ、まだ運転が始まったばかりで今日の全員分の食事を賄うのは難しい。さらに明日の出港に向けて作業を進めている者に考慮して今回提供された食事は握り飯２つと沢庵。牛肉の大和煮であった。

太田「ヤマトに乗艦して最初の食事がこれかぁ・・・」

気象長、太田が嘆息混じりに呟く。

相原「仕方ないだろ。明日の出港に向けて、作業を続けている奴もいるんだ。それらを考慮してるんだろ」

南部「食えるだけありがたいじゃないか。地下都市じゃ、食料の配給の量も減ってるんだから」

太田の呟き対し、南部と相原が返す。

太田「分かっちゃいるけど、ひもじいわぁ～」

太田のような体格の大きい者には、少しもの足りないように感じるようだった。

古代「今日の飯はおにぎりと、沢庵に」

島「牛肉の大和煮かぁ」

古代と島も引き継ぎを終え、休憩に入った。配給缶に入れられてた食事を取る。そこから手頃な席を探すと、誰も座っていない座席を見つけて座る。

古代・島「「いただきます」」

二人で食事をとりながら、自分のことについて話し始めた。
古代「なぁ、島」
島「どうした？」
古代「どうして、俺が特進して戦術長なんだろうか？」
島「どうしてって、上が決めたに決まってるだろう」
古代「それは、そうだが…。俺には戦術長になるような資質があるとは思えない」
古代は、自分が戦術長に任命されたことを疑問に思っているようだ。
島「そうは言っても、これまでで大勢の軍人が亡くなったんだ。今いる軍人の中で、訓練学校で成績の良かったお前が選ばれたのは必然だろ」
古代の疑問に対して、島は一般的な答えを返す。
古代「そう言う島はどうなんだ？自分がいきなり大型艦の航海長に任命されて」
島「そりゃあ驚いたさ。この艦は人類初のワープが出来るんだ。そんな艦の操舵をするのが俺で良いのか？って。でも、任命されたからにはやるしかないって割り切ったさ」
古代「…」
「どうした、お前さん達？」
そこへ、一人の男性が声をかけてきた。禿げ頭の男性は機関科の制服を身に纏っていた。
古代「あなたは…」
古代と島にとっては初めて見る顔であった。
徳川「おっと。そういえば、わしは〝さっき〟おらんかったから知らんのも無理は無い。真田君から聞いておると思うが、わしが機関長の徳川じゃ。宜しく頼む」
古代「戦術長の古代です」
島「航海長の島です」
徳川「古代に島か。ところで、何を悩んでおるんじゃ？」
古代「実は…」
…

古代は、自分が2階級も特進して戦術長になったことに疑問を感じていることを伝えた。
徳川「なるほどのう・・」
古代「徳川さんは機関長に就任した時は、どうだったんですか？」
徳川「わしが昇進して機関長に任命された時は、率直に言うと嬉しかったな。自分が周りに認められた証だからかのう。でも、喜んでおられることばかりじゃない。昇進するということは責任がついてくる。部下を纏め、指示を出す。わしら罐焚きは船のお守り。いかなる時でも罐の相手をしなければならん。生きて帰るためには、わしら罐焚きよるところがあるからのう。職務を全うする事を考えたのう」
古代「そうですよね・・」
悩む古代に、徳川は何かを思い出したのか「そうじゃ」と言うと古代に向き直る。
徳川「古代。一度、沖田艦長に聞いてみると良い」
島「また、どうして？」
古代「ああ。艦長が人員については、最終的に決めたそうじゃ」
徳川「分かりました、ありがとうございます」
徳川に礼を述べて夕食を食べ終えると、古代は足早に去って行った。
ヤマト　艦長室
沖田は艦長室で写真を手に取り眺めていた。そこへ、ドアがノックされる。
古代「失礼します、古代です」
沖田「入りたまえ」
沖田は写真を本に挟み、ドアの方を見る。
入室した古代は、真剣な眼差しを沖田に向ける。
沖田「何だね」
古代「艦長、どうして自分が二階級特進の上に戦術長なのでしょうか？自分にはその素質があるとは思いません」
古代が沖田に戦術長に選ばれた理由を問う。
沖田「経歴、能力、資質。お前を始めとする人間を、総合的にわし

が見て決めた。・・だが、多くの人材を失った上での人選であるのも事実。わしは、お前の席に座るはずだった者を死なせてしまったからな・・」

沖田は声のトーンを落とす。

沖田「お前の兄だ」

古代「!!!」

沖田「当初、戦術長には古代守を。お前は守の交代として艦橋要員での起用を考えていた」

沖田の口から、古代が選ばれた経緯が語られた。

古代「では何故あの時、兄に撤退を命じなかったんですか!!あの時、殿として留まるのではなく撤退を命じていたら兄は生きて帰ってこれたのでは!!」

古代は兄の名前が出てきたことに驚き、思わず沖田に突っかかる。

沖田「戦場は常に命がけだ。彼の行動が無ければ、我々はイスカンダルからの使者を地球へ連れ帰る事は出来なかっただろう。もちろん、失われた命の重みは消えない。その亡くなった戦士たちの尊い命の上で今がある」

古代「・・」

沖田「古代、戦術長の任務を全うするかはお前次第だ」

沖田は、古代を見据える。

古代「兄の意志は自分が継ぎます」

古代は、沖田にそう答えるのだった。

その頃、冥王星基地ではシュルツの命令を受け惑星間弾道弾の発射準備が行われる。ミサイルの格納庫から、ベルトコンベアによって発射場まで運ばれて行く。ミサイルは、誘爆防止の防火筒に収められている。ミサイルは全長１１５８ｍという超巨大な代物だ。それらが格納庫に多数納められている。もし、自然発火でもしたら基地は一瞬にして吹き飛んでしまう。そのために防火筒が付属されている。

「焦らず、迅速にせねばならん。我々、ガミラスの軍人に失敗は許されん」

シュルツが部下たちに何度も言い聞かせてきた言葉だ。その言葉

通り、彼らの動きに乱れは無い。
「惑星間弾道弾、発射準備完了!!」
「ゲート開きます」
「発射まで、あと１０秒」
　カウントダウンが始まった。
「９・８・７・６・５・４・３・２・１」
「発射!!」
　数字が０になるとエンジンが始動し、ノズルから炎が噴き出す。打ち上げられたミサイルは、地球へ向けて放たれた。

　防衛軍司令部
　時刻は午前３時、交代しながら２４時間体制で警戒を強めていた。突如として、それはやって来た。そう、ガミラスのミサイルだ。ミサイルを最初に捉えたのは、冥王星観測望遠鏡であった。次に偵察衛星がミサイルをレーダーが探知した。司令部は一気に慌ただしくなる。藤堂が報告を受けたのは、司令部に戻ってきた直後であった。
　電測員「長官、ガミラスの大型ミサイルを確認。現在、ミサイルは火星宙域に入りました」
　芹沢「予測落下地点は？」
　司令部職員「現在、コンピューターによる落下地点の計算中です」
　スーパーコンピューターを用いて進路予測が行われる。司令部には、偽装した衛星が捉えたミサイルの情報がリアルタイムで送られ続ける。
「何だこれ‼？」
　突然、職員の一人が声を上げた。
　藤堂「どうした!?」
　職員「衛星からの情報が途切れ始めました」
　職員「火星の観測衛星が、プラズマの放射を検知。電波障害です」
　偵察衛星から送られてくる情報を管理するコンピュータのデスクには太陽系が映し出されている。冥王星からの先ほどまでの進路。そして、つい先ほどの位置が表示されていた。しかし、衛星からの情

報を受信出来なくなったのかミサイルの位置を示すマーカーはそこから動いていなかった　▪
芹沢「何だと、こんな時に▪▪」
藤堂「今ある情報だけでも構わん。急いで算出するんだ」
職員「りょ、了解」
職員が急いで、コンピューターにデータを入力する。その一方、土方はドアに向かって歩き始める。
土方「長官」
藤堂「土方君？」
土方「私は、弾道弾の迎撃に向かいます。出撃許可を」
藤堂「▪▪今、動かせる艦は？」
職員たちに問いかける。
職員「きりしまの応急修理が午前５時には完了します」
藤堂「ふむ▪」
参謀からは、きりしまの応急修理が完了するという返答だった。
藤堂「きりしまに出撃命令を。土方君、頼んだぞ」
土方「はっ」
弾道弾を迎撃するため、土方は司令室を退出する。
「ヤマトへ連絡だ。出港を急ぐように伝えよ」
０３：５０
宇宙戦艦ヤマト　艦長室
防衛軍司令部より弾道弾の情報が伝えられ、艦内では作業が急ピッチで進められていた。艦長室では真田が資料を手に、波動エンジンの始動方法について沖田へ説明をしていた。
真田「以上が、私が考えた波動エンジンの始動方法です」
沖田「この状況で、実現は可能なのかね？」
真田「技術的には可能です。ただ、人類がこの艦をどこまで信じるかによります」
出港に向けての最大の課題。それは、波動エンジンの始動であった。真田は技術士官として、自ら考えたプランは技術的な面では可能であると断言した。真田の計画が成功するか否かは人の信じる心。

ヤマトをどこまで信じるかがカギとなるとのことだ。▪
沖田「人は未だに人を信じる気持ちを試されるのか▪▪。司令部の藤堂長官へ連絡。本案件を進めてくれ」▪
真田「はっ」
真田の計画を認め、司令部に連絡を取るように命じた。

ヤマト　第1格納庫
古代は、自ら搭乗する機体の確認のため格納庫にいた。第1格納庫には、最新鋭の艦上戦闘機コスモゼロが2機格納されていた。01というマーキングが記入された機体がメインで、02と記入された機体は予備機として搭載されていた。現在、古代以外は誰もいない。
加藤「あっ、いたいた」
古代「？」
ドアが開く。振り向くとそこには、見覚えの丸刈りの青年がいた。
古代「加藤さん」
加藤「久しぶりだな、戦術長」
声の主は、共に偵察機を迎撃した加藤であった。
加藤「乗艦してから挨拶に行こうと思ったんだが、忙しくてな」
古代「加藤さんも乗組員だったんですね」
加藤が乗艦していたことに驚く、古代
加藤「まあな。あと、俺の上官になるんだ、敬語はいい」
古代「ですが▪▪」
加藤「俺が良いって言ってるんだ。気にすんな」
古代「なら、そうさせて貰う」
古代は加藤の言うとおり、呼び捨てで呼ぶことにした。
古代「加藤。あの後、コスモスパローはどうなったんだ？」
加藤「あの後回収されたが、修理する部品が無いからな。格納庫に放置されている」
壊してしまった古代の心には、罪悪感が渦巻いていた。
古代「なんか、すまない」
加藤「謝ることは無い。モノはいつか壊れるんだ」

古代「でも…」
加藤「大丈夫さ、あの機体はビーキー過ぎるんだ。まともに乗りこなせたやつは、俺が見た限りでは戦術長ともう一人しかいない。そいつも、負傷して今は第1線を退いているがな。万人に扱えるブラックタイガーの方が防空には必要なのさ」
加藤は、そう笑いながら言ってのけた。

04：00
防衛軍司令部
通信員「長官、真田少佐より入電。何やら、図面が一緒に添付されています」
藤堂「こっちに回してくれ」
通信員「はっ」
通信員がキーボードを操作。藤堂の目の前の画面に一つの図が映し出された。
藤堂「これは…」
図を見つめる藤堂。芹沢以下、参謀達も見つめる。
藤堂「なるほど…。そういうことか」
芹沢「長官、これは一体？」
参謀の1人が藤堂に尋ねる。
藤堂「これは真田君が考えた送電システムだ。ヤマトは膨大な電力を必要としているのだよ。まずは、計画停電を実行するように政府へ連絡せよ。管内の電力全てを、ヤマトへ供給するんだ」
藤堂は参謀へ達へ伝える。そこへ、芹沢が口を挟む。
芹沢「待ってください、長官。政府にはどう伝えるおつもりで？性急過ぎて、政府が賛成するとは思えません」
芹沢が否定的な意見を口にする。
藤堂「政府には、私から伝える。芹沢君は、弾道弾への対処に集中してくれ」
芹沢「…分かりました」
その後、藤堂の必死の説得を受け政府は計画停電を実施することを

決め、ヤマトへ電力の供給が開始された。

０４：４５

ヤマト　第１艦橋

相原「艦長、司令部より入電。「ガミラスノ惑星間弾道弾ヲ確認。間モナク火星軌道ヲ抜ケル模様。発進ヲ急ガレタシ」」

沖田「司令部には「了解」と伝えろ。徳川君、機関の始動状況は？」

艦橋と機関室でやり取りが続く。

徳川「補助エンジンの始動準備は完了しました。波動エンジンは、現在充填作業中です」

沖田「０６：００までには作業を完了させてくれ」

徳川「了解」

砲雷長席に着く南部が報告を上げる。

南部「艦長、各種武装の点検が終わりました」

雪「メインレーダー、起動します」

真田「艦内機構に異常無し」

太田「メインコンピューター、正常」

各自が出港に向けて、自分の席に着き計器を確認する。

太田「あの～弾道弾って一体・・・」

連絡を受けたとき、第２艦橋で航海に必要な機器の点検作業のため不在だった太田が弾道弾について尋ねる。

真田「司令部からの報告だ。偵察衛星が冥王星基地から大型の弾道弾が発射されたのを確認している。恐らく、標的は本艦だ。」

太田の疑問に真田が答える。

太田「ええっ、それまずいじゃないですか!!」

真田「だが、今の我々に出来ることは無い。出港に向けての工程を進めて行くだけだ」

真田の言うとおり、今のヤマトには何も出来ない。ただ、黙っているだけ。この間も弾道弾は地球へ接近している。

０５：００

東京・地下ドック
地下のドックに停泊している戦艦きりしまの船体には、至るところに被弾の跡が残ったままであった。機関と武装の応急修理を優先して行ったためであった。
宇宙戦艦きりしま　艦橋
土方は、きりしまの艦橋にいた。艦橋では、いつものように艦長の山南が出港に向けての指示を出している。
山南「艦長、発進準備完了しました」
土方「了解した。司令」
山南から土方へ指示を乞う。土方は、腕時計に視線を落とす。時刻は、まもなく5時半をまわろうしていた。
土方「発進だ」
土方は、出撃を命じた。
山南「出港用意」
艦橋から機関室へ伝えられる
機関室
機関長「機関始動、低速回転１２００」
エンジンに火が入った。機関の振動が、少しずつ大きくなり始める。
管制室
管制員「ガントリーロック解除」
船体を固定するガントリーロックが外れ、きりしまは宙に浮いた。
管制員「ゲート開きます」
きりしま　艦橋
山南「両舷前進微速」
航海長「両舷前進微速」
山南が命じ、航海長が復唱する。きりしまは、ゆっくりとゲートへ向けて動き始める。整備員達が敬礼をしながらきりしまを見送る。
防衛軍司令室
職員「長官、時間の割出が終わりました」
電波障害から1時間後、到達時間が算出された。

藤堂「いつ頃、到達する見込みだ？」
職員「０５：５８です」
ヤマトの発進まで時間がない。
芹沢「きりしまには、迎撃地点へ急行。ヤマトは発進を急ぐように伝達。」
司令室では、参謀や職員が急いでやり取りを行う。弾道弾は刻一刻と迫っていた。

０５：３０

宇宙戦艦きりしま　艦橋
航海長「艦長、予定の宙域に到達しました」
航海長が予定の位置に付いたことを報告する。
山南「状況はどうだ？」
山南が艦の状況について問う。
機関室「機関に異常にありません。整備班が一生懸命整備してくれたお陰です」
電測員「レーダー、正常」
砲雷長「陽電子砲、今のところ異常なし。ですが、そう多く撃てないと思います」
各部より報告が上がって来る。ドックにて応急修理をしたとはいえ、万全と言い難い。特に、主砲周りに関してはメ号作戦時に受けた動力部のダメージが酷いため、応急修理でどこまで戦えるか分からない。今は艦を信じるしかない。

０５：５５

宇宙戦艦ヤマト　第１艦橋
相原「艦長、司令部より通信が入っています」
沖田「パネルへ映せ」
相原「了解」

通信機を操作する。相原が通信をメインパネルに映すと藤堂の姿が映る。
藤堂「沖田君、敵弾道弾の到達時刻が判明した。到達時刻は０５：５８。ジャミングが強く、解析に時間がかかってしまった。すまない」
藤堂から正確な時間が告げられた。
沖田「長官、準備は整いました。エンジンが始動次第、発進します」
藤堂「頼んだぞ、沖田君」
司令部とのやり取りを終え、発進準備に入る。
雪「弾道弾を捕捉。現在、月軌道に入りました」
搭載しているコスモレーダーが弾道弾を捉えた。メインパネルに弾道弾が映し出される。そこへ、徳川機関長も機関室から、艦橋へ上がっての制御に入る。
沖田「徳川君、機関の方はどうか？」
徳川「大丈夫です、いつでも行けます」
沖田「よし、出港用意!!」
出港用意の号令がかかり、配置に付く乗組員達。
徳川「補助エンジン始動、低速回転１６００」
艦橋から機関室へ補助エンジンの始動が告げられる。機関員が制御盤のレバーやスイッチを押す。２基搭載されたコスモタービン改が動き出す。
徳川「フライホイール始動」
次いで、波動エンジンのスターターモーターの役割を持つコスモタービン改の動きを伝えるフライホイールが起動する。振動が艦全体に広がりつつある。
島「波動エンジン、スイッチオン。フライホイール接続」
徳川「接続」
操舵席にある波動エンジンの始動レバーを、所定の位置まで目一杯引いた。
「・・」
・・だが、先程まで響いていたエンジン音は急激に小さくなって行っ・

た。
島「艦長、動きません!!」
冲田「計器を確認せよ」
島は再び各計器に目を通す。メーター、レバー等を1つ1つ確認していく。その間にも弾道弾はヤマトへ接近している。
雪「艦長、月軌道に艦影です」
相原「識別信号を確認……きりしまです!!」

ガミラスの弾道弾は、きりしまの艦橋から視認できる距離にあった。
宇宙戦艦きりしま　艦橋
電測員「敵弾道弾を捕捉しました」
ついに、弾道弾が月軌道に到達。レーダーが捉える。
土方「砲撃用意!!敵弾道弾の回転軸を狂わせ進路を変える」
全ての砲塔が弾道弾に向けられる。地球とヤマトに向かわないように進路を変更させなければならない。砲雷長が慎重に座標の確認を行う。回転軸の右側、そこへ狙いを定める。
砲雷長「座標確認、照準よろし」
土方「全火器、一斉集中」
山南「撃てぇー!!!」
陽電子砲とミサイルが弾道弾に向けて一直線に突き進んで行く。光球が生じた。
砲雷長「全弾命中」
山南「進路は!?」
電測員「進路、外れました」
山南「やったか!!」
艦橋内にいる誰もが安堵した表情になる。弾道弾は攻撃を受け、進路が変わった。だが、登載するスラスターを使用し、進路の修正が始まった。これに電測士が気づいた。
電測員「大変です!!軌道が修正されています」

土方「何っ!?、第２射急げ!!」
砲雷長「駄目です。エネルギー供給出来ません!!」
再度、攻撃命令が出される。しかし、砲塔は煙を吹き上げている。応急修理では１回の全力射撃が限界だったようだ。
電測員「高速プラズマの衝撃波来ます」
山南「全艦衝撃に備え」
きりしまをプラズマの衝撃波が襲う。艦が大きく揺れ、照明が落ちた。予備照明に切り替わり、艦橋内は薄暗くなった。
土方（沖田、すまん）
土方は心の中で沖田に詫びた。

宇宙戦艦ヤマト第１艦橋
雪「きりしま離脱」
沖田は、離脱を余儀なくされたきりしまの様子を見つめる。
島「艦長、申し訳ありません。連動スイッチがオフになっていました」
島が波動エンジンの起動の失敗原因を報告する。
沖田「島、もう一度だ」
しま「はい」
再び、エンジンする始動に入る。
徳川「補助エンジン始動、低速回転１６００」
エンジンの始動音が鳴り響く。
徳川「フライホイール始動」
島「連動スイッチ良し。波動エンジンスイッチオン」
徳川「フライホイール接続」
フライホイールが波動エンジンに繋がれ、動き始める。
徳川「波動エンジン、圧力上昇」
島「エンジン回転数良好。行けます」
沖田「垂直上昇、上げ舵一杯」
島「よーそろー」
岩盤が割れ、地下に埋まっていた部分が露になる。送電ケーブルが

外れ、錨を巻き上げる。
沖田「抜錨、ヤマト発進!!」
島「抜錨。ヤマト発進します」
宇宙戦艦ヤマトがついに空へ浮かぶ。２５４年の眠りから目覚めたのだ。
沖田「島、取り舵一杯。古代、ここで奴を迎撃する。主砲発射用意」
古代「はっ。主砲発射用意」
島「取り舵３０度」
雪「弾道弾の到達まで、あと２分」
ヤマトが左に旋回すると同時に、甲板上の４６ｃｍ３連装砲と１５．５ｃｍ３連装砲が弾道弾の方向に向けて指向する。
南部「主砲、エンジンよりエネルギー伝導終わる。測的よろし」
古代「自動追尾、定点固定」
南部「自動追尾よろし」
古代「照準誤差修正＋２度。目標、軸線に乗った」
沖田「撃ち方始め!!」
古代「撃てぇー!!」
１５門の砲口から撃ち出された青い閃光は、螺旋状なり目標へ一直線に向かった。
雪「着弾、今!!」
砲口から放たれた光の筋は、弾道弾を捉えた。そして、爆発。弾片は熱エネルギーで熔けて消滅。地上では、キノコ雲が立ち上がっていた。

防衛軍司令部
司令部に設置されたモニターの画面からヤマトの映像が途切れた。
職員「高エネルギー反応を確認しました」
藤堂「ヤマトはどうなった!?」
モニターには、徐々に映像が映っていく。そこには、火山が噴火した時の噴煙の倍はありそうな黒煙が立ち上っていた。そこにヤマトの姿はない。

芹沢「計画の練り直しですな」
芹沢がそう呟いた。あれだけの黒煙が立ち上るくらいだ。ヤマトは、莫大な熱エネルギーによって跡形も無く溶けてしまったと考えてもおかしくない。
藤堂「２番の映像を拡大しろ」
藤堂が何かに気付いたようだ。すぐに２番の映像が拡大すると、黒煙の中からヤマトの姿が確認できた。
職員「ヤマトです・・ヤマトを確認しました!!」
歓声に包まれる司令部。職員達は椅子から立ち上がり、喜びを分かち合っていた。
宇宙戦艦ヤマト　第１艦橋
島「安定翼展開」
真田ｄ「波動防壁展開完了。各部より報告、船体に損傷認められず。波動防壁は機能しているようです」
黒煙の中から姿を現したヤマトからは、１つも損傷が見つけられなかった。
沖田「うむ。古代・島、良くやった」
島「やったな古代」
古代「ああ」
ヤマトは、どんどん高度上げ登っていく。これから往復２９万８０００光年の旅が始まった。人類が生存を許された一年以内に達成しなければならない。
人類の期待を受け、イスカンダル目指す旅が始まった。人類滅亡まで、あと３６３日。

第9話　光速を越える、ワープ航法

ヤマトは大気圏を突破、星の海へと船出した。
宇宙戦艦ヤマト　第1艦橋
島「大気圏突破、安定翼格納。波動エンジン、大気圏外出力へ」
宇宙空間へ出ると安定翼が格納され、波動エンジンも出力を切り替わる。メインパネルには、真っ赤に染まった地球が映っている。
相原「酷い姿だな…」
南部「頭の中では理解していても、こうして見てみると違うもんだな」
相原と南部が感想を呟いた。
古代「2人は、宇宙へ出るのは初めてか？」
相原と南部の話を耳にした古代が2人に聞いた。
相原「地上勤務ばかりだったので、初めてです」
南部「宇宙に出るのは初めてじゃないが、この姿の地球を見るのは初めてだな」
古代「宇宙に出る船乗りはこの姿を見るたびに、ガミラスへの怒りを新たにするのさ」
古代は、悔しそうな表情で地球を見つめていた。
雪「艦長、右舷後方よりきりしま接近」
雪が、きりしまの接近を伝える。
相原「きりしまより発光信号。「貴艦ノ健闘ト、航海ノ無事ヲ祈ル。生キテ帰リヲ待ツ」以上です」
発光信号を相原が読み上げる。
きりしまがヤマトの隣に付き並走する形となる。甲板にて船外服を着用した乗組員が敬礼する姿が見えた。艦橋にいる全員で返礼を返し、徐々に速度を上げて地球を離れた。
沖田「本艦はこれより巡航速度で火星へ向かい、ワープテストを行う。メインクルーは火星到着後、中央作戦室へ集合するように、以上だ」
艦長室へ上がった沖田から、艦内放送でワープテストのため火星へ

向かうことが告げられた。人類最後の希望、宇宙戦艦ヤマトのイスカンダルを目指す大航海が始まった。
一方、きりしまは帰還しようと進路を変更しようとした矢先のことであった。
宇宙戦艦きりしま　艦橋
プラズマ衝撃波のダメージを受け、消えていた明かりが艦橋に再び灯る。
土方（頼むぞ、沖田。そして、無事に帰って来い）
艦橋にて土方は、ただ黙ってヤマトを見つめていた。そこへ通信長から報告が入る。
通信員「艦長、救援の通信を受信しました」
山南「何処からだ？」
通信員「月面基地からです、今から音声を流します」
そう言うと、通信機を操作し音声を艦橋内に流す。
「こちら月面基地、第７空間騎兵連隊。我が隊は空母艦載機からの襲撃を受け、孤立状態にあり。我が隊の被害は甚大。至急、救援を乞う。繰り返す。」
土方「山南、進路を月へ向けろ」
山南「了解。航海長、進路を月へ。通信長、月面基地へ発光信号を。衛生科は負傷者の受け入れの準備を急げ」
各部署へ指示が出され、きりしまは月面基地へ進路を取った。
襲撃を受けた月面基地は、あちこちに焼け焦げ、兵器の残骸が散らばるなど空襲の被害が残っていた。月面基地が襲撃を受けたことにより、配備されていた迎撃砲といった重火器の喪失により惑星間弾道弾に対する攻撃が不十分になってしまった。
月面基地
「こちら月面、第７空間騎兵連隊。我が隊は空母艦載機の襲撃を受け孤立状態にあり。我が隊の被害は甚大。至急、救援を乞う。繰り返す。」
「本当に直ってるの、それ？」
救援を送り続ける男性隊員に、唯一の女性隊員である永倉志織が話

しかける。
「そのはずだ」
通信機の前に座る空間騎兵隊・第７連隊所属に所属する天城敏男は、ひたすら救援を送り続ける。一方、部屋の中央ではドックタグを握りしめる副隊長、斎藤始は荒い呼吸を続ける一人の男性に寄り添っていた。
「うっ・・」
斉藤・「連隊長!!」
連隊長と呼ばれた男、桐生悟郎は傍らに寄り添う男の姿を認め、名前を呼んだ。
桐生「斎藤か・・なんて顔してる」
部屋の中には救援を送り続ける天城の声が響くばかりだった。
「いくら打ったて無駄だよ」
隊員の１人、倉田勝が諦めたように言った。
永倉「倉田!!」
倉田「本当の事さ。上は俺たちのことなんて忘れちまったんだよ」
倉田の言葉通り通信設備の復旧後、救援要請の通信を送り続けていたが返信は来なかった。迎撃による負傷者が多発。衛生兵の処置の甲斐なく、息を引き取った隊員は日が経つごとに増えていった。さらに、地球には満足に動かせる船も無い。自分たちは見捨てられたと思っても仕方がなかった。
桐生「迎えは来る。俺たちは命ある限り諦めない、それが空間騎兵魂だ。忘れるな！」
「はいっ!!」
桐生は、叱咤激励のため全員に言い放った。
斉藤「副隊長!!」
外から１人の兵士が斎藤を呼んだ。斎藤は外に出ると先程から１人で見張りに付いていた隊員から双眼鏡を手渡され、指差す方角を見る。
斉藤「何だあれ!?」
斎藤は思わず叫んだ。そこには、見たこともない宇宙船がいた。グ

レーと赤の船体色。甲板上には、高くそびえ立つ前鐘楼と砲塔らしき構造物が確認できる。それは、水上艦のような見た目をしていた。
■?斉藤「ガミラスの艦じゃ無い。ということは、地球の新造艦なのか■■」
■斎藤はそう漏らした。
永倉「ねえ、あれ!!」
目の前の宇宙船に気を取られていた斎藤は横からの声で我に帰った。いつの間にか横にいた永倉が指を差す方向に目を向けると、宇宙戦艦が発光信号を発しながらこちらに接近して来ていた。
斉藤「連隊長、友軍です。助けが来たんです!!」
救援が来た。壊滅状態にある連隊の希望の光。斎藤は、すぐに階段を下りて仲間の元へ向かい隊長の桐生へ報告する。しかし、連隊長の桐生からは返事は無く聴こえるのはそばにいる倉田のすすり泣く声のみ。天城に目■を向けると首を横に振った。
斉藤「そんな■桐生さん!!」
その後、月面■基地に降り立ったきりしまに全員が収容された。
宇宙戦艦きりしま　艦橋
山南「これより月軌道を離脱する。両舷前進半速」
航海長「両舷前進半速」
機関が唸りを上げ、月軌道を離脱する。
乗組員「誰だ貴様は!!許可無く艦橋に入ることはできん!!」
斉藤「うるせえ!!こっちは話があんだよ!!」
艦橋の外から怒鳴り声が聞こえてきた。扉から空間騎兵隊の宇宙戦闘服をきた斎藤が入ってきた。彼の手には戦死した隊員のドックタグが握られていた。
斉藤「アンタが艦長か!?もう少し救援が早ければ、連隊は壊滅しなかった!!」
斎藤は、怒りを顕にする。戦死した隊員の名前が記入されたプレートの音が艦橋に響く。
斉藤「こっちの通信は受けていたんだろう!?何故もっと早く■■」
山南は、正面に立つ土方を艦長と思い込んでいる斎藤に声をかけ

る。
山南「艦長は俺だよ」
砂糖「なっ・・」
山南の発言に驚く斎藤。
山南「この方は、地球防衛軍防衛総隊・艦隊司令長官、土方大将だ」
まさか、話しかけた相手が大将クラス。艦隊司令と知った斎藤は唖然とするが、すぐに姿勢を正して土方へ敬礼する。
土方「ガミラスに勝利し、故郷に再び青い姿を取り戻す・・。我々は、その任に就く特務艦護衛のため展開していた」
斉藤「じゃあ、俺たちはついでだったという訳ですか!!」
土方「そうだ」
土方から告げられた事実に顔をしかめる斎藤。
斉藤「・・さっきの艦か。何なんですかあれは!?」
土方「・・」
斎藤は、・・ついさっき見たことの無い宇宙船を思い出す。あれが特務艦であることに違いないと確信した斎藤は土方に問う。しかし、土方は答えない。
斉藤「こっちは命懸けで戦っているんだ、聞く権利はあるはずだ!!」
山南「おいおい・・」
斎藤に落ち着くように山南が制する。
土方「ヤマトだ・・」
斉藤「ヤマト?」
土方「そうだ、ヤマトだ・・宇宙戦艦ヤマトだ。俺の親友の艦。そして、人類最後の希望だ」

冥王星基地
司令室ではシュルツ、ガンツ以下の兵士たちがメインモニター映るヤマトの映像を見ていた。ミサイルの弾着観測のためにメルトリア級空母も派遣していた。現在、冥王星基地には、偵察機が撮影している映像を母艦が経由してリアルタイムで送られている。この時、偵察機はステルス性能に特化させた機体を使用し、熟練の偵察員の操縦で

偵察を行っているためヤマトでは偵察機の存在を知る者はいなかった。
シュルツ「我らの初弾を退け、出てきたか」
ヤマトを見ながら、シュルツは呟いた。
ガンツ「まさか、惑星間弾道弾を破壊するなんて」
冷静に見つめるシュルツに対し、唖然とするガンツ。今まで猛威を奮ってきた弾道弾が、宇宙戦艦の主砲射撃で破壊されるなど夢にも思わなかった。
ガンツ「あの艦は、一体何なんでしょうか？」
シュルツ「移住用か、本土決戦用の宇宙船のどちらかだろう」
ガンツの問いにシュルツは今考えられるだけの可能性を上げる。
シュルツ「奴らの目的が気になる。空母に打電。徹底的に監視、可能であれば撃沈するよう伝達せよ」
ガンツ「はっ」
冥王星基地からの命令を受領したメルトリア級はヤマトの追跡を開始した。

宇宙戦艦ヤマト　中央作戦室
現在、主要クルーが中央作戦室に集められワープ航法に関する説明と打ち合わせが行われた。まずは、沖田の前置きから打ち合わせが始まる。
沖田「我々が２９万６０００光年という距離を１年以内に往復するためには、光の速さで進んでも不可能だ。だが、波動エンジンはワープ航法が可能となっている。我々は、波動エンジンを使いこなさなければ地球を救うことは出来ない」
そこから、技師長兼副長の真田から波動エンジンを用いたワープ航法の仕組みに付いて説明がされる。
真田「私からワープについて説明します。ワープとは光の速さを越えて航行する方法です。まず、これを見てください」
足元のパネルに一つの円と小さな点が映し出された。
真田「これは、アインシュタインの閉じた宇宙論を示しています。

そして、この点がヤマトのいる時間です。点に注目してください」
真田の言う通りに点に注目する。
「「!!?」」
突然消え、気付いた時には全く別の場所へと出現していた。
真田「ワープとは、時間を飛び越える方法です。時間が波だとすれば頂点から頂点まで移動する場合、通常は谷間の分だけ時間が無駄になります。しかし、ワープなら頂点から頂点に移動するので時間のロスはありません。ですが、実際のワープはそうも簡単にはいきません」
さらに説明は続く。
真田「我々のいる地点は、この点になります。そして、この横線はワープすべき場所の時間軸を表しています。時間のズレのためわずかに歪みが出来ています。ワープを成功させるには、歪みを0に、つまり2つの点が重なる時にワープしなければなりません。もし、少しでもタイミングがずれたら、3次元空間と4次元空間の間に挟まってしまい、ヤマトだけでなく宇宙そのものが崩壊してしまう可能性があります」
ワープの仕組みと危険性について述べたところで真田の説明が終わった。
「この際、私からも説明させてください」
真田の隣に控えていた女性士官が声を上げた。
新見「技術科・情報長の新見です。我々は、波動エンジンが生み出す膨大なエネルギーを兵器に転用することに成功しました」
南部「一体、どんな武器なんです?」
南部が訪ねると、新見は手に持つ端末を操作する。すると、床のパネルにヤマトの断面図が現れた。
新見「これが、我々が開発した兵器、艦首波動砲です。まずはこれを」
新見がタブレット端末を操作すると、ヤマトの断面図に文字が表示される。
新見「波動砲とは、波動エンジンの生み出した高密度のタキオン粒

子のエネルギーをそのまま艦首前方に発射する兵器になります。エンジンを停止させて波動砲への回路を開き、エネルギーを送ります。薬室内部へタキオン粒子を充填し、最大まで圧力をかけた後に発射。射程圏内に存在する物質はあっという間に蒸発します」

映し出された図を見ながら波動砲のシステムについて解説を聞く。

南部「それって、ヤマト自体が巨大な大砲になるってことですか？」

新見「その通りよ。ただ、波動砲を撃つとエネルギー切れになってしまうから状況を良く見て使う必要があるわ」

南部「なるほど…」

新見の説明に納得する南部。

古代（波動砲か…）

古代も波動砲について心に留め置いておくことにした。

真田「艦長、これで波動砲の説明は終わりました」

冲田「ご苦労だった。このように、波動エンジンの運用には細心の注意を払わなければならない。まずはワープの試験を成功させる。総員は非常事態に備え、試験時には船外服を着用するように。以上だ」

ここで、ブリーフィングが終わり解散となった。その後も巡航速度で航海し、火星へ到達した。

メルトリア級空母

電測員「不明艦、進路変わらず」

レーダーを監視する電測員が報告する。空母はヤマトの後方にぴったりと付いて監視を続ける。

通信「艦長、不明船の情報が送られてきました」

偵察機から送られてきた画像を基にした解析結果を報告する。

通信「不明艦は全長２６３ｍ・全幅３３ｍ。武装には３連装主砲塔３基、３連装副砲２基、対空火器を多数搭載しています。主砲口径は恐らく３３ｃｍ～４０ｃｍ程と思われます」

艦長「大型の戦闘艦か。他に分かっている情報は？」

通信員「傍受した通信の解読から、名前が〝ヤマト〟と判明しました」

艦長「ヤマトか…」
艦長は、偵察機から送られてくる画像に映るヤマトをただ無言で見つめていた。
それから暫くして火星宙域に入ったところで、〝それ〟は訪れた。
電測員「艦長、ヤマトが停止しています!!」
艦長「何、本当か!?」
報告を受け、レーダースクリーンに目をやると、ヤマトを示す印は止まっていた。
電測員「はい。本艦の前方、５００００ｍで停止しています」
艦長「ふむ…」
副長「如何致しますか?」
冥王星基地からは、〝可能であれば撃沈せよ〟と命令を受けている。突然湧いて出た、ヤマトを攻撃するチャンスを逃す訳にはいかない。
艦長「航空隊に出撃命令を出せ。さらにこちらもミサイルの射程圏内まで接近し、ヤマトを仕留める」
航空隊長「はっ」
出撃命令を受け、艦橋にいた隊長は格納庫へ降りて行った。
副長「しかし、宜しいのですか?あの艦は、多数の対空火器を装備しています。航空隊への被害が甚大なものになる可能性が…」
艦長「大丈夫だ、対空火器は船体上部に搭載している。ならば、下方から攻撃すれば良い。空母のように艦載機を積んでいなければ迎撃は難しいだろう」
確かに、ヤマトの対空火器であるパルスレーザー砲は船体上部、甲板上に設置されている。艦底部の武装はミサイル発射口のみ。彼の読みは半分正解していた。

宇宙戦艦ヤマト　第1艦橋
沖田「これより、ワープのテストを行う。このテストを成功させなければ地球を救うことは出来ない。総員、気を引き締めて取り組んでくれ」

沖田から全乗組員にワープテストの開始が伝えられる。万が一、緊急事態に備え船外服を全員が着用して持ち場についていた。
太田「航路、天王星軌道に設定。航海長へ座標送ります」
太田から島へ、ワープ先の座標が送られる。
島「座標確認、ワープ準備」
送られた座標を航法装置へ入力する。
徳川「波動エンジン、エネルギー充填開始」
機関室では徳川機関長の指示の下、機関員が波動エンジンの操作を行う。
徳川「エンジン室圧上昇」
ワープに向けての工程を順調に消化していた時だった。
雪「レーダーに反応あり。未確認飛行物体接近。ビデオパネルチェンジ」
レーダーが捉えたビデオパネルに映し出される。そこには見覚えのあるモノが映っていた。
沖田（あれは、ガミラスの空母か……だが、我々を攻撃するには遠すぎる）
そこにいたのは、先日ヤマトを攻撃してきた空母の同型艦であった。
雪「敵空母、艦載機の射出しています。数１５…２０…現在も増加中！」
雪が操作し、モニターを拡大すると空母が艦載機を発艦させていた。
古代「畜生、こんな大事な時に……。艦長、攻撃許可を」
沖田「徳川君、敵艦が現れた。兵装へエネルギーを回してくれ」
戦術長の古代が攻撃許可を求め、沖田は機関室の徳川機関長へ問い合わせる。
徳川「艦長、一度エンジンにエネルギーを回しているので兵装には回せません。ワープ準備を中断させるのであれば可能ですが、また一からやり直しになります」
機関長からの返答は、ワープ準備中に兵装へのエネルギー供給は不

可能というものだった。
沖田「・・・真田君、ワープまでの所要時間は？」
沖田は敵艦への攻撃を捨て、ワープで逃げることを選んだ。技師長の真田へワープまでに掛かる時間を尋ねる。
真田「・・・ワープにどれだけ時間が掛かるのか、今の段階では不明です。人類にとって初めての事ですから」
申し訳なさそうな表情で真田が答える。人類にとって未知の領域であるワープ航法についての概要や方法について知っている彼でも、準備にどれくらい時間が必要なのかは分からなかった。
古代「艦長、ワープの準備は続けてください。航空隊で迎撃します」
沖田「頼むぞ。ワープ開始までに戻って来い」
古代「分かりました。相原、ブラックタイガー隊に出撃命令を出してくれ」
相原「了解」
古代が航空隊での迎撃を具申し、沖田はワープ開始までに帰艦することを条件にこれを許可。艦内放送で航空隊への出撃命令が発令された。
航空隊ｓｉｄｅ
相原「敵空母出現。航空隊は出撃、これを迎撃せよ」
待機室に艦橋からの出撃命令が伝えられる。命令を受け第２格納庫に向かうパイロット。各々が割り当てられた機体に乗り込んだ。
加藤「いいか皆、ヤマトに乗艦してからの初めての戦闘だ。互いにカバーしながら死角を潰せ。敵にヤマトを攻撃をさせるな」
隊員たち「「了解」」
加藤が隊員たちに発破をかける。ヤマト航空隊で宇宙での初陣を飾る者もいる。加藤は隊の士気を高めるため、自ら率先して行動を起こしていた。古代は第１格納庫へ向かい最新鋭の艦上戦闘機コスモゼロへ搭乗する。
加藤「ブラックタイガー隊、出撃」
発艦口が開いた。艦載機パレットに固定され格納されているブラックタイガーは、ジャッキで発艦口に設置されたカタパルトに運ば

れそのまま宇宙空間へ射出されていく。コスモゼロも、甲板へ出るとジャッキで艦尾の射出機へ運ばれる。
整備員「古代大尉、発進準備完了しました」
古代「了解」
管制室から発進準備完了の報告を受ける。管制室との短いやり取りを終え、エンジンを始動させると、射出機から機体が押し出される。
古代「これより、敵航空隊との戦闘に入る。部隊ごとに分かれて展開。深追いせず、ヤマトに近づく敵だけを攻撃するように」
３つの部隊に別れて展開し、そこから空戦を仕掛ける。ブラックタイガー隊がメランカの上方から機銃を放つ。もちろんメランカも回避運動を行うが、ミサイルを懸架するメランカの動きは、ブラックタイガーから見ると遅いため余裕を持って修正し攻撃を命中させた。この攻撃で４機のメランカが撃墜された。それでも攻撃を突破した機体は、ヤマトへミサイルを放つ。
古代「攻撃目標をミサイルへ切り替え。加藤隊と山本隊は敵編隊へ攻撃。篠原隊はミサイルの迎撃に回れ」
加藤「了解した」
山本「了解」
篠原「任せてください」
加藤隊と山本隊へ敵編隊への攻撃を任せ、古代と篠原隊はミサイルの迎撃に回る。照準機に捉えたミサイルに機銃掃射を慣行。篠原以下の隊員の活躍もあり、ミサイルはヤマトに到達する前に全てが撃墜された。
古代（よし、なんとかヤマトへの被害は免れた…）
篠原「戦術長、俺の隊がここに残ってミサイルの迎撃をしますんで戦術長は敵編隊への迎撃に向かってください」
古代「いいのか？」
篠原「ええ。ガミラスの野郎にヤマトへ一発たりともミサイルは命中させないんで」
古代「そうか、任せたぞ」
再び周囲を見渡し攻撃する敵機に狙いを定め、戦闘宙域へ翻してい

く。加藤隊は艦載機への襲撃を継続し、ここまで新たに９機を撃墜していた。敵も最初の４機が撃墜され、身軽な戦闘機相手に不利と判断したのかミサイルを放つとすぐに離脱した。攻撃後に反撃してくる機体もいたが、返り討ちにされていた。その後も空戦は続き、ここまで１６機を撃墜した。

一方のブラックタイガー隊の損失は０。２機１組でカバーしながら撃墜していた。空母から発進したメランカは、ヤマトへ最後の攻撃を仕掛けようしていた。

加藤「来るぞ、恐らくあれが最後だ。気を抜くな」

ブラックタイガー隊は斜め上方からメランカ隊へ襲撃する。この銃撃を受け、３機が墜落していく。ここで、１機が反転。ブラックタイガー隊へ攻撃してきた。

加藤「散れっ」

直ちに散開し、銃撃を回避する。すぐに加藤のブラックタイガーが反撃、撃墜した。だが、１機のブラックタイガーが主翼を撃ち抜かれていた。

山本明ｓｉｄｅ

コックピット内部にＳＩＤの警告音声が鳴り響いた。

ＳＩＤ「エンジン出力低下、メインノズルに異常発生」

山本「くそっ・・」

主翼の付け根部分から黒煙を引いていた。エンジンの出力を示す計器の数値は徐々に減少し始めている。計器上に表示されるコードに従い、操作を開始する。他の機体が近寄り無線で状況を尋ねてくるが無線で答える余裕が無いため、手信号でエンジンのトラブルである事を伝えた。機体の操縦系統が被害を受けていないことが不幸中の幸いであった。

宇宙戦艦ヤマト　第１艦橋

真田「機関の調整が整いました。あと１０分でワープが可能になります」

真田から沖田へ、ワープの準備が整ったことが告げられる。
沖田「うむ。相原、ブラックタイガー隊を呼び戻せ」
相原「了解。こちらヤマト、ブラックタイガー隊は直ちに帰艦してください」
ヤマトから航空隊へ帰艦命令が発令された。着艦シーケンスに移行し整備員が格納庫へ、負傷者がいた場合に備えて、衛生兵が格納庫の外で待機する。
航空隊ｓｉｄｅ
加藤「大丈夫か山本？」
山本「隊長…俺は大丈夫です。機体のほうもなんとか」
被弾した山本機に加藤機が接近する。本人に怪我は無いものの警報は未だに鳴り続けている。
古代「加藤、急いでヤマトへ戻るぞ」
そこへ、古代から帰艦命令が伝えられる。他の隊員達のブラックタイガーは続々とヤマトの元へ戻って行く。
加藤「了解。だが、山本が…」
古代「どうした？」　…
古代が山本機に視線を向ける。
山本「すまない、戦術長。被弾した」
古代「大丈夫なのか？」
山本「なんとかな。戦術長はヤマトへの帰艦を急いでくれ、後で追い付く」
古代「分かった、必ず帰ってこい」
古代と加藤は山本機を離れ、ヤマトへ戻って行く。ワープ開始まで１５分を切っていた。
宇宙戦艦ヤマト　第１艦橋
南部「航空隊の収容、間もなく完了します」
南部から沖田へ航空隊の収容作業が終わりつつあると報告する。
古代も第１艦橋へ戻ってきた。
徳川「波動エンジン圧力上昇」
雪「レーダーに異常ありません」

沖田「ワープ開始１０分前。総員、安全ベルト着用」
古代「待って下さい、まだ1機帰艦していません」
古代が未収容の機体を収容するまで待つよう頼みこむ。
沖田「ワープの中断はできん。収容を急げ」
沖田はワープの中断を認めず、収容に全力を上げるように指示した。古代は踵を返し、第1艦橋から第2格納庫へ駆け出した。
山本ｓｉｄｅ
山本（俺もここまでか・・）
機体の損傷は大きなもの・となり、計器に映る警告の文字も膨大なものになっていた。
古代「山本、早く帰って来い。ワープまで、あと１０分を切っぞ。急げ」
古代が無線で山本に呼び掛ける。
古代「戦術長、俺はヤマトに戻れそうにない。俺に構わずワープを実行してくれ」
山本は、自分を待たずにワープをするよう訴える。しかし、古代は認めなかった。
古代「馬鹿野郎!!!諦めるな、何としてでも戻って来い」
山本「俺を回収していたら、予定が狂っちまう。・それに、空母はすぐ近くに来ている。無防備のヤマトを狙われたら・」
古代「それでもお前はブラックタイガー隊の隊員か・!!?いいか山本、石に噛りついてでも戻って来い!!」
古代は訴えかけた。
山本「・・分かったよ、戦術長、ワープまでにヤマトに帰艦してみせる」
山本は通信を切り、ヤマトを目指す。
山本「メンテナンスハッチ強制解放、冷却材を後方に投棄」
被弾した機体はなかなか言うことを聞かない。
山本「頼む、言う事聞いてくれよ」
ヤマトに接近し、着艦ルートを維持しようと試みるが、被弾した機体はふらついてなかなか安定しない。

古代「もっと右だ、右!!!」
古代は、管制室で山本機に指示を出す。
古代「行き過ぎだ、左に寄れ!!」
山本は、なんとか安定させようと必死に操縦捍を握る。
古代「良いぞ、そのままだ」
姿勢を安定させ、着艦体勢になんとか入ることに成功。牽引ビームによって着艦。ジャッキによってレールに上げられ、格納パレットに固定された。

宇宙戦艦ヤマト　第1艦橋
南部「ブラックタイガー、全機収容」
第2格納庫から収用完了を受け、南部が報告する。
沖田「ワープ開始2分前」
ワープの時間が迫って来る。
島「空間歪曲装置、作動」
島は、ワープ向けて空間歪曲装置を起動させた。このワープテストの結果次第で地球を救うことが出来るかが決まる。
古代（頑張れよ、島。命は預けたぜ）
古代は、隣に座る親友を見る。操縦捍を握り締め、緊張した面持ちで計器見ていた。
島（古代はヤマトを無事に守った。俺も、絶対にワープを成功させてみせる）
深呼吸して心を落ち着かせる。
雪「秒読みに入ります」
雪がカウントダウンを開始。地球の運命を賭けて、人類の大勝負が始まる。
島「両舷、前進一杯」
速度を限界まで上げ突き進むヤマト。
雪「10・9・8・7・6・5・4・3・2・1」
島「ワープ!!」
レバーを引き、操縦捍を目一杯倒す。ヤマトは加速し、光と共に一

瞬で姿を消した。

第１０話　浮遊大陸

メルトリア級はヤマトへミサイル攻撃の最終段階を迎えていた。
メルトリア級　艦橋
砲雷長「測敵よろし、発射口開け」
電測員「ヤマト、捉えた」
艦長「発射!!」
ヤマトへ向けて複数のミサイルを放つ。ミサイルは狙い違わずヤマトへ向かって行く。ヤマトも動き始めたが、ミサイルは命中コースを突き進む。艦橋の誰もが命中を確信した。だが……。
艦長「なにっ!!」
ミサイルが命中する直前にヤマトが姿を消してしまった。
艦長「消えた･･･だと･･･」
加速した一瞬のうちに、消えたヤマト。目標を見失ったミサイルは、ヤマトのいた地点を虚しくも通り過ぎて行った。電測士がレーダースクリーンを見るも、反応は消えていた。突然の出来事に皆が言葉を失った。静まりかえる艦橋に電測士が報告する。
電測員「艦長、ヤマトはジャンプした模様です!!」
艦長「そんなバカな!?テロンの宇宙船はジャンプなど出来なかったはずだ!!」
電測士の報告に衝撃が走る。それもそのはず、地球艦は核熱融合推進機関を使用している事がこれまでの戦いでのデータから判明している。そのような機関でのワープ航法は不可能だ。
電測員「ジャンプの空間航跡が残っています。これを見てください」
そう言うと、電測士はレーダーを操作する。索敵用から航路監視用に切り変えられたレーダースクリーンには、確かにワープの空間航跡が残っていた。
艦長（間違いない、奴はジャンプしている･･･。ヤマトは、今までのテロン艦とは違う）
艦長は、確信した。〝ヤマトという宇宙戦艦は１隻の強襲空母の手

に負える艦では無い〃。ワープによる航法が可能ということはそれだけ搭載するエンジン、兵装も強力という事になる。さらに、空母同様に艦載機を持つ。航空隊の練度も十分。現に、帰艦した機体の殆どが要修理が必要と判断されるほどの損傷を負わされていた。補修資材も数が足りないと整備班から報告が上がっていた。また、航空隊の負傷者も少なからず出ると予想される。現在、救難信号を受けて動かせる機体を搭乗員の救助に向かわせている。艦載機あってこその空母である。その殆どの艦載機が手傷を負わされた状況で監視、可能であれば撃沈という任務を続行するか？ヤマトは我々の存在を知っている。

艦長「今から言う文面を司令部へ報告しろ」

考えた結果、彼は撤退を選んだ。艦長の命令を受け、通信士は冥王星基地へ打電した。

冥王星基地

通信員「強襲空母より入電、「我、ヤマトニ戦闘ヲ仕掛ケルモ航空隊ノ被害甚大。ヤマトハ、ジャンプシ逃亡。1隻デハ無ク複数ノ艦艇デ対処スルベキ」以上です」

通信士が強襲空母からの報告を伝える。・・・

シュルツ「やはり、只者では無かったか・・・」

冥王星基地司令シュルツは、強襲空母からの報告を受けてそう洩らした。惑星間弾道弾を一撃で破壊せしめたあの艦は、強襲空母による襲撃で沈むほどヤワではなかった。さらに報告は続く。

通信員「司令、空母より作戦の一時中断の要請が来ています。なんでも艦載機の大半が損傷、修理が必要との事です」

シュルツ「・・・浮遊大陸基地へ寄航させてやれ」

通信員「はっ・・・」

シュルツは空母への機関命令を発した。通信兵は、帰還命令を空母へ伝達する。さらに、指示は続く。

「監視衛星も使え。少しでもヤマトに関する情報を集めるのだ!!」

冥王星基地は、ヤマトの情報を集めるために本格的に動き出した。

ワープを実行した宇宙戦艦ヤマト。ワープ中の艦内では乗組員を浮遊感が襲う。・足が地についていないような、ふわふわと海を漂うクラゲのような・そんな感覚が体を支配する。ワープを終え、通常空間へ出ると艦体に・貼り付いた氷が剥がれ落ちていく。

宇宙戦艦ヤマト　第1艦橋

島「ワープ終了」

ワープを終え、島はほっと一息つく。

太田「現在、本艦は通常空間にいます」

太田が、ヤマトの現在位置を確認する。

沖田「状況を報告と座標を確認せよ」

ワープによる艦への負荷を確かめるため、各々が計器を確認する。

真田「艦体に損傷は認められず」

南部「火器管制システム、異常ありません」

雪「レーダー、異常ありません。周囲に障害物、および敵艦影無し」

相原「通信設備に異常は認められません」

真田・南部・雪・相原が報告する。

古代（どうやら無事ワープに成功したみたいだな）

古代が安堵していると、突然、ヤマトを揺れが襲う。

島「な、なんだ!?」

艦体が大きく振動する。突然の事態に、ざわつく艦橋。

太田「右舷より重力場を確認!!」

太田が報告する。ヤマトを包み込む異常振動の正体は、重力と判明した。

沖田「ビデオパネルへ映せ」

周囲の様子を・確認するため、パネルに周囲の様子が映し出される。

沖田「これは・・木星だ!!」

沖田が驚きの声・を上げる。天王星宙域へワープするはずが、なんと木星へとワープしていたのだった。

太田「大変です、木星の重力に引き摺られています!!」
重力場の観測にて、ヤマトに強大な木星の重力が作用しており、高度が徐々に下がっていたのだった。
沖田「島、反転１８０度。急ぎ重力圏から離脱せよ」
島「反転１８０度、ようそろ」
木星の重力に捕まると大変な事になる。ヤマトは木星に背を向け、エンジンを吹かして重力から逃れようとする。だが、ここで不測の事態がまたしても降りかかる。
古代「何だ、今の振動は!?」
突如として、振動が艦全体を包み込み非常警報が鳴り響く。
島「エンジン出力が低下してる・・機関長!!」
島が視線を落として計器を見ると、波動エンジンの出力を示す計器の針が下がり始めた。島はマイクで徳川機関長へ状況を問う。
徳川「波動エンジンが異常振動を起こしとる。わしらも原因を調べとるから、少し待て」
島「くっ・・」
必死に操縦桿を握り、ヤマトを操る。だが、推力が弱まったヤマトが木星の重力に完全に捉えられてしまうのは時間の問題だ。
太田「木星大気圏内まで、あと１０分」
太田が計器を航路監視用から惑星観測用に切り替える。
島「畜生!!思うように操縦出来ない・・」
沖田「落ち着け、島」
沖田は島に落ち着くよう諭す。艦内に鳴り響く警報音。異常振動の答えは機関室から伝えられた。
徳川「こちら機関室、徳川。波動エンジンの動作が不安定になっとります。補助エンジンでの動力運用に切り替えて、安定を試みます」
波動エンジンを停止させ、補助エンジンでの航行に切り替える。だが、ヤマトはどんどん引き寄せられていくばかりであった。
太田「艦長、このままではヘリウムの海に突入してしまいます。いくらヤマトでも、重力場の奥深くに入り込んでしまえば、脱出は困難です!!」

太田が観測しながら、報告をする。ヤマトがヘリウムの海の奥深くへ沈み、脱出が出来なければ人類は滅亡の道を歩むことになる。そのような事はなんとしても避けなければならない。
沖田「島。下部バーニアを使え。なんとしても持ちこたえるんだ!!」
島「下部バーニア、噴射!!」
離着陸の際に使用する下部バーニアも出せる限りの出力で噴射する。
島「駄目だ、振り切れない!!」
太田「惑星大気圏に突入します!!」
しかし、ヤマトは重力を振り切ることができず木星大気圏へ突入した。
沖田「島、上げ舵１５度」
島「上げ舵１５度」
ヤマトの周囲にはヘリウムを主とした雲が漂っていた。艦首を持ち上げ、ヘリウムの雲へ突入する時間を遅らせようとする。だが、木星の重力は強力であり波動エンジンが停止している状態で艦首を持ち上げただけでは効果は薄い。
沖田「島、主翼展開。艦を水平にし、滑空の要領で高度を維持せよ」
島「ようそろ」
次は、濃密な大気を利用して滑空機のように飛行する。そこへ、レーダーが正体不明の何かを捉えた。
雪「艦長、未確認飛行物体を確認!!」
艦橋内部に緊張が走る。今のヤマトは高度を保つので精一杯だ。そこを襲撃されるとなると、今よりもさらに悪い状況に陥ってしまうかもしれないという不安がよぎる。
沖田「こんな時に敵か!?」
雪「いいえ、敵艦ではありません。右舷に大型の物体を確認」
沖田「パネルに映せ」
メインパネルに外の様子を映し出す。レーダーに反応があった2時の方向、ヘリウムの雲の中から浮遊する岩塊がヤマトの前に出現し

た。高度が下がるにつれて岩塊の全貌が明らかになった。
沖田「これは、大陸なのか…」
その岩塊は、大陸と呼べるほど広大な面積を保有していた。宇宙博士号の称号を持つ沖田も初めて見るものであった。
太田「巨大な岩塊はオーストラリア大陸と同等の面積を持っています」
観測用レーダーによると、巨大な大陸はオーストラリア大陸と同程度の大きさを持っていた。
沖田「島、浮遊大陸へ着陸だ」
島「ようそろ」
ヤマトは浮遊大陸へ進路を向けた。周囲に浮かぶ岩塊を避けながら、着陸を試みる。少しでも操縦を誤れば、ヘリウムの海へ落ち、木星の重力によってヤマトは跡形も無く押し潰されてしまうだろう。
古代「取り付いた!!」
沖田「制動、ロケットアンカー射出」
艦首スラスターによる制動を掛け、ロケットアンカーを打ち出す。ロケットアンカーは岩山へ深く突き刺さる。しかしそれだけでは止まらない。突き刺さったアンカーの鎖は伸びきり、ヤマトは振り回される。
島「太田、不時着出来そうな場所は!?」
ヤマトを止めるため、周囲の状況を島が太田に尋ねる。
観測用レーダーで周囲を調べると、ヤマトの前方に液体反応が検知された。
太田「前方に湖と思われる液体反応あり!!」
島「よし、それで止める。総員ショックに備えろ!!」
全員が不時着の衝撃から身を守る体勢を取る。ヤマトは派手に水飛沫を上げながら湖に着水した。
島「…着水成功」
無事に不時着したヤマト。緊張の糸が切れた島は、ほっと息を吐いた。衝撃から身を守る体勢を解き、背もたれに寄りかかる。
沖田「被害を確認せよ」

不時着に成功したヤマト。だがどんな被害を受けているか分からない。再度、確認が行われる。
雪「レーダー異常なし」
真田「艦体に損傷認められず」
南部「各種兵装、異常なし」
徳川「こちら、機関室。波動エンジンの冷却器に損傷を確認。直ちに修理を開始します」
幸いなことに、特に異常は見られなかった。機関科は徳川機関長指揮の下、直ちに修理を始めていた。
南部「しっかし、木星にこんなモノがあるなんてなぁ」
相原「本当だよ。浮遊する大陸なんて、物語くらいにしか出てこないもんな」
南部が外の景色を見ながら呟く。相原も同じようなことを考えていたらしく、感想を口にした。
太田「どう思いますか、技師長？」
真田「私も驚いたよ。木星にこんなモノがあるなんて、今まで知られていなかったからな」
気象長席に座る太田と、真田は会話しながらコンソールに映る情報に目を通す。
太田「技師長は、この浮遊大陸は一体何だと思います？」
真田「それは、調べてみないことには分からんな」
アナライザー「ソウイウ時はワタシの出番デス」
自立行動状態になったアナライザーが、自分に任せろと言わんばかりに胸を張る。
真田「アナライザー。手伝いを申し出てくれるのはありがたいが、調べる時間が無いんだ」
アナライザー「ソンナ～。セッカクの機会ニ、ワタシの素晴ラシサを披露ヨウと思ッテイタノニ」
真田「お前の力を借りる時はまだ先だ。働いてもらう時には、お前の腕を存分に披露してくれ」
真田に調査は行わないと告げられ、肩を落とすアナライザー。そん

なアナライザーの様子に真田は苦笑した。

木星浮遊大陸基地

「司令、大変です!!」

木星浮遊大陸基地を任された、４０代位のガミラス軍人の執務室。彼の元へ若き新兵が駆け込んで来た。

「一体何だ、騒がしい」

息も絶え絶えに、その新兵は報告を開始した。

「それが、正体不明の宇宙船が■■」

「宇宙船?」

「とにかく司令室へ来てください!!」

司令室にいた当直の慌てる様子に、ただ事では無いと判断した司令官は席を立つ。当直に言われるまま執務室から司令室に向かうと、そこには見たことも無い宇宙船が湖に鎮座している様子がモニターに映っていた。

「これは、一体何なのだ!?」

「司令!!」

「■冥王星基地へ連絡だ。急げ!!」

■通信員が冥王星基地へ連絡。数秒後には冥王星基地に繋がり、スクリーンに基地司令を務めるシュルツ大佐の姿が映った。ガミラス式の敬礼を行い、事態の説明する。

「司令、緊急事態です。正体不明の宇宙船が浮遊大陸に不時着しました。」

「何だと?」

「こちらが、その宇宙船です。」

冥王星基地へ映像を送ると、シュルツ司令の表情が変わった。そこへ、副官や数人の部下と話し始めた。

「浮遊大陸基地へ命令。直ちにこの宇宙船を攻撃せよ」

「この宇宙船は、テロンの宇宙船だ。ガミラスのテロン侵攻の障害はここで取り除くのだ!!」

「はっ!!」

冥王星基地は、攻撃命令を伝えると通信を終えた。
「当基地配備の全艦を持ってこの宇宙船を叩く。総員、出撃準備!!」
冥王星基地からの攻撃命令を受け、早速行動を開始する。この浮遊大陸基地に配備されている戦力は、デストリア級重巡洋艦1隻、クリピテラ級駆逐艦3隻。探索任務に用いる攻撃機メランカ３６機であった。格納庫では慌ただしく出航準備が行われていた。乗組員が駆け足でタラップを上る。
「全艦、出航準備が整いました」
「直ちに出撃せよ!!」
格納庫のゲートが開き、ヤマト撃滅に向かった。

宇宙戦艦ヤマト　第一艦橋
雪「あっ」
沖田「どうした？」
雪「右舷3時の方向より、接近してくる飛行物体を確認・・・ガミラス艦です!!」
古代「何だって？」
沖田「詳しく報告せよ」
ヤマトのレーダーが敵を捕らえる。突如として現れたガミラス艦。修理が完了するまで休憩中であった彼らにとっては、思いもよらない事態となってしまった。
雪「接近してくるガミラス艦は4隻。大型艦が1隻、小型艦が3隻。距離１５万ｋｍ」
太田「艦首識別・・・大型は重巡洋艦、小型は駆逐艦と確認」
南部「主砲及び副砲は依然として動力の供給は不可」
波動エンジンの修理が行われている今、頼みの綱はミサイルとパルスレーザー砲、爆雷投射器のみ。
沖田「徳川君、機関の修理状況は？」
徳川「あと、3分で終わります。それまで待てませんか？」
機関室から修理の進捗状況が伝えられる。
沖田「・・・・合戦準備」

古代「総員戦闘配置!!」
冲田は接近するガミラス艦を迎撃を命じた。
冲田「いいか古代。聞いての通りだが、ヤマトの主砲は使えん。敵の射程圏内に入る前に撃破せよ」
古代「了解しました、艦長。南部、各ミサイル発射管へミサイルを装填。敵の機関部を狙うコースで頼む。パルスレーザー砲は対空戦闘の状態で待機」
南部「了解」
冲田「島、いつでも発進出来るようにしておけ」
島「はい!!」
艦内では、乗組員がそれぞれの配置場所に付く。今回の戦闘の主役であるミサイル発射管側では、冥王星沖海戦で有効性が確認されたミサイルが装填されている。
雪「ガミラス艦との距離、９万ｋｍ。重巡を先頭に高速接近中」
デストリア級重巡が先頭に立ち、クリピテラ級が後方に付く単縦陣でヤマトへ接近する。
南部「各ミサイル発射管、発射用意完了」
古代「まずは、先頭の重巡を狙う。その後、駆逐艦を攻撃」
雪「敵艦との距離、７万ｋｍ」
冲田「攻撃開始!!」
古代「撃てぇ!!」
８門の発射管からミサイルが白煙を引きながらガミラス艦へ向かって飛翔する。そこへガミラス艦が単縦陣から梯形陣へ陣形を変更した。ヤマトへ四方から攻撃を行うための陣形変更と思われた。
雪（お願い、当たって……）
雪は祈りながらレーダースクリーンを見つめていた。